
ソーシャル・キャピタルの創出とヘルスケアデータ一元化による
地域包括ケアシステム研究拠点の形成

平成 27 年度～令和元年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
研究成果報告書

令和 2 年 5 月

学校法人名 学校法人冬木学園

大 学 名 畿央大学

研究組織名 ヘルスプロモーションセンター

研究代表者 研究部門長 文鐘聲

はしがき

畿央大学ヘルスプロモーションセンター研究部門は、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の採択を受け、「ソーシャル・キャピタルの創出とヘルスケアデータ一元化による地域包括ケアシステム研究拠点の形成」というテーマに沿って、2015年度～2019年度の5か年間にわたり研究プロジェクトに取り組んできました。

我々は本プロジェクトを KAGUYA プロジェクトと名付けました。これは、「Keeping Active across Generations Uniting the Youth and Aged」の頭文字をとったもので、若者と高齢者が一体となって、世代を超えていきいきとし続けられるまちづくりを目指す、というキャッチフレーズを基に本学が所在する広陵町と本学が協働で事業を進めていきました。本プロジェクトは、住民ヘルスケアデータの統合一元化（プラットフォーム構築）を進め、今までのデータヘルスの課題であったデータ把握困難者へのアプローチ及びデータ活用実践の方法について人材育成を手段として進めることで、住民の健康増進及び介護・認知症施策に寄与するかを明らかにすることにより、上記研究を推進していくための研究基盤を形成することを目的としました。

住民ヘルスケアデータについては、広陵町に居住する全高齢者と40歳以上65歳未満の壮年期住民の約半数を対象に研究期間中それぞれ2回の質問紙調査を行い、分析を行うことができました。また、個人情報保護を遵守した上で、広陵町から提供を受けたヘルスケアデータの一部と上記質問紙調査の統合一元化をはかることができました。自治体が持つ住民の健康情報と大学のデータが一元化されることで研究基盤を形成できたことの意義は大きいと考えます。今後、地域住民との信頼関係を保ち、情報公開を積極的に推し進めていくことにより、研究の推進のみならず、科学的根拠に基づいた政策立案へのフィードバックにも寄与し続けたいと考えております。

また、タブレット端末から利用できる健康・認知症チェック用アプリケーション「きおトレ」の試作を行いました。町内の認知症カフェや老人クラブとの関係づくりによって実用性検証のためのフィールドを確保することにより、更なる発展性をもった展開が期待できます。人材育成という側面では、本プロジェクトの原点になった介護予防住民リーダー（KEEP）及び本学の学生健康支援チーム（TASK）が引き続き活躍してくれました。それらに加え、認知症カフェの活動を通して認知症サポーターも養成し、地域住民と本学学生との協働の場が一層増え、ソーシャル・キャピタル醸成に寄与することができました。

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は、地域住民の生活様式に大きな変化をもたらしました。本プロジェクトは、それに伴う新たな健康課題や生活様式と地域住民のソーシャル・キャピタルとの関連を明らかにするための貴重な研究基盤が形成されたものと思います。

このような研究成果をあげることができたのは、メンバーであった教員及び2名の博士研究員、担当事務職員及び広陵町役場職員との協働の賜物であり、心より感謝いたします。また、本プロジェクトを推進するにあたりご支援をいただいた文部科学省、広陵町、畿央大学及び関係者の皆様にはこの場を借りて深謝いたします。

研究代表者

畿央大学ヘルスプロモーションセンター

研究部門長 文鐘聲

法人番号	291005
プロジェクト番号	S1591009L

平成 27 年度～令和元年度「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」 研究成果報告書概要

- 1 学校法人名 冬木学園 2 大学名 畿央大学
- 3 研究組織名 ヘルスプロモーションセンター
- 4 プロジェクト所在地 奈良県北葛城郡広陵町馬見中4-2-2
- 5 研究プロジェクト名 ソーシャル・キャピタルの創出とヘルスケアデータ一元化による
地域包括ケアシステム研究拠点の形成
- 6 研究観点 研究拠点を形成する研究

7 研究代表者

研究代表者名	所属部局名	職名
文 鐘聲	ヘルスプロモーションセンター	研究部門長

8 プロジェクト参加研究者数 9 名

9 該当審査区分 理工・情報 生物・医歯 人文・社会

10 研究プロジェクトに参加する主な研究者

研究者名	所属・職名	プロジェクトでの研究課題	プロジェクトでの役割
文 鐘聲	ヘルスプロモーションセンター・研究部門長	・地域介入におけるQOL向上、医療費・介護保険費削減等の効果検証 ・ヘルスケアデータ統合プラットフォームの開発	・プロジェクトリーダー ・アウトカムの検証 ・ヘルスケアデータ統合プラットフォーム化 ・ヘルスケアデータにおける効果的フィードバックの実現
高取 克彦	ヘルスプロモーションセンター・センター長	住民・学生に対する教育的指導が健康関連指標に与える影響	住民・学生の人材育成・測定・調査
福森 貢	理学療法学科・教授	・ヘルスケアデータの効果的なフィードバック法の開発 ・ヘルスケアデータ統合プラットフォーム及び健康課題スクリーニング法の開発	・ヘルスケアデータにおける効果的フィードバックの実現 ・ヘルスケアデータ統合プラットフォーム化及び認知症チェックアプリ開発
山崎 尚美	看護医療学科・教授	認知症サポーター育成事業が住民への啓発・早期発見に与える影響	・認知症に関するアプリ作成 ・認知症サポーター育成
松本 泉美	看護医療学科・教授	地域介入における住民の健康関連指標・ソーシャル・キャピタルへの効果	町民調査の作成・分析

法人番号	291005
プロジェクト番号	S1591009L

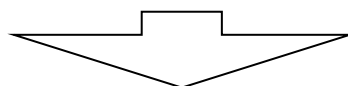
松本 大輔	理学療法学科・准教授	住民・学生に対する教育的指導が健康関連指標に与える影響	住民・学生の人材育成・測定・調査
福本 貴彦	理学療法学科・准教授	住民・学生に対する教育的指導が健康関連指標に与える影響	住民・学生の人材育成・測定・調査
瓜谷 大輔	理学療法学科・准教授	住民・学生に対する教育的指導が健康関連指標に与える影響	住民・学生の人材育成・測定・調査
串田 修	畿央大学 客員研究員	住民・学生に対する教育的指導が健康関連指標に与える影響	住民・学生の人材育成(栄養)
(共同研究機関等)			

<研究者の変更状況(研究代表者を含む)>

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
住民・学生に対する教育的指導が健康関連指標に与える影響	ヘルスプロモーションセンター・センター長	浅野 恭代	住民・学生の人材育成(栄養)

(変更の時期:平成 29 年 7 月 1 日)



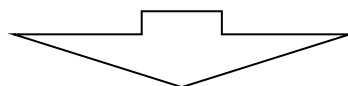
新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
健康栄養学科・講師	畿央大学・客員研究員	串田 修	住民・学生の人材育成(栄養)

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
ヘルスケアデータ統合プラットフォーム及び健康課題スクリーニング法の開発	教育学部・教育学習基盤センター・助教	宮崎 誠	ヘルスケアデータ統合プラットフォーム化及び健康チェックアプリ開発

(変更の時期:平成 31 年 3 月 31 日)



新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割

11 研究の概要(※ 項目全体を10枚以内で作成)

(1)研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要

我が国の老年人口割合は世界で最も高く、また世界有数の長寿国でもある。このような状況下で、地域において高齢者がいきいきと生活できるようにコミュニティを整備することは喫緊の課題である。近年、地域包括ケアシステムの構築が叫ばれているが、高齢者はもちろん、壮年期を含む若い世代も重要であり、専門職による「医療・看護」、「介護・リハビリテーション」、「保健・予防」の3つの生活支援・福祉サービスによる支援も重要である。

近年、地域住民の健康を増進させるための方策の一つとして、ソーシャル・キャピタル(人々の協調行動を活発にすることによって、社会の効率性を高めることのできる、「信頼」・「規範」・

法人番号	291005
プロジェクト番号	S1591009L

「ネットワーク」といった社会組織の特徴)が注目されている。ソーシャル・キャピタルの構成要素である「つきあい・交流」・「信頼」・「社会参加」が活発になれば、地域住民の健康を増進し、将来的には孤立死などを防ぐ有効な手段の一つとなると考えられる。

効果的かつ効率的な地域包括ケアを進めるには、住民のヘルスケアデータ(健診データ、体力、認知症等)の蓄積・運用が基盤となる。しかしながらそれらのデータは分散しており、十分に活用できていないのが現状である。

本プロジェクトの目的は、住民ヘルスケアデータの統合一元化(プラットフォーム構築)を進め、今までのデータヘルスの課題であったデータ把握困難者へのアプローチ及びデータ活用実践の方法について、人材育成を手段として進めることで、住民の健康増進及び介護・認知症施策に寄与するかを明らかにすることにより、上記研究を推進していくための研究基盤を形成することである。

本研究プロジェクトの効果は、大学、地域住民、自治体の観点から以下の点が期待される。まず大学の視点としては、①地域住民のヘルスケアデータ一元化による研究基盤の構築、②データの蓄積により高齢化と健康を地域で継続観測することが可能、③地域住民へのヘルスプロモーションによる地域貢献、④地域に強い若手研究者の育成が期待される。次に、地域住民の視点からは、⑤個人の健康関連データを総合的に把握することが可能、⑥ソーシャル・キャピタルの創出により地域活性化、⑦健康知識を有する地域住民リーダーの育成により他の住民に対してきめ細やかな健康アプローチが可能となることである。また、自治体の視点からは、⑧地域住民への健康情報の提供とデータに基づいた効果的な指導が可能、⑨ソーシャル・キャピタルの創出により住民間の健康格差が縮まり、健康寿命の延伸が期待される、⑩健診未受診者の特徴が明確化され、健康増進へのアプローチ方法の構築が可能、⑪将来的に、医療費削減につながる土壌をつくることが可能である。本プロジェクトの成果が地域住民に浸透することによって、地域への社会的貢献も大いに期待できるということである。

研究計画については、以下 4 項目の研究を通じて、効果的、効率的な地域包括ケア推進のため実践とその知見を得ることを目標として計画した。

1) ヘルスケアデータ統合によるプラットフォーム構築に関する研究

本学と広陵町が協働で行ってきた各種体力・身体測定と運動教室におけるデータ、国民健康保険のレセプト(診療報酬明細)及び介護保険のレセプト(介護報酬)、住民調査の結果などを統合しプラットフォームを構築することにより、地域に分散した詳細な住民の健康データを一元化し、蓄積していくことで本研究の基盤を構築する。その際、地域、大学の健康データを継続的に一元化するために必要な手続きを整理し、個人情報や安全に管理・運用するための事務的・技術的なワークフローを確立する。また、大学の研究者が一元健康データベースを利用して、研究に必要なデータを表示・取得し、分析できるようにする。分析により明らかとなった地域の健康課題等は、地域にフィードバックし、新たな施策に役立てることとする。

2) 健康・認知機能低下の効率的なスクリーニング方法およびそのアプリケーションの開発

地域住民が気軽に自身の健康情報や認知機能の低下に関する情報を評価できるようにするため、簡便なスクリーニング法を開発する。これらは高齢者にも比較的容易に操作可能なタブレット端末等の電子デバイスを用いて行なう。

3) 健康啓発・予防医療推進のための住民リーダー人材育成による効果検証

自身の健康情報を得た後、どのように健康増進あるいは介護予防を行なうかが課題であるが、個人では限界がある。そこで、健康啓発・予防医療・介護予防推進、認知症施策のための住民リーダーを養成することによって、ソーシャル・キャピタルを増加させる。

4) 住民への健康支援を多専門分野で構成される学生チームで行なうことによる教育効果

健康科学・教育学を学ぶ学生たちが学科の垣根を超え、実際に住民と触れ合い、気づき、実践していくことで得られる効果を検討する。この実践は学習意欲を高め、異なる学科の分野

法人番号	291005
プロジェクト番号	S1591009L

も含まれることから視野の拡大、多世代と関わることからコミュニケーション能力向上にもつながる。また、自分自身の健康行動の改善や、住民支援の方法の理解、地域の課題への認識が高まる。また、住民が若者と関わることへの心身への効果も期待できる。

(2) 研究組織

本研究プロジェクトは、以下、4つの研究班で構成し、それぞれにサブプロジェクトリーダーを置き、月例会議を設け、研究代表者が統括した。

- 1) ヘルスケアデータ統合によるプラットフォーム構築に関する研究
- 2) 健康・認知機能低下の効果的なスクリーニング方法及びそのアプリケーションの開発
- 3) 健康啓発・予防医療推進のための住民リーダー人材育成による効果検証
- 4) 住民への健康支援を多専門分野で構成される学生チームで行なうことによる教育効果の検討

研究代表者は、上記各サブプロジェクトの統括を行った。学内での月例会議等において各サブプロジェクトの進捗を把握し、研究者間のディスカッションを促進させることにより研究者間の連携と相乗効果を図った。また、1) ヘルスケアデータ統合によるプラットフォーム構築に関する研究、2) 健康・認知機能低下の効果的なスクリーニング方法及びそのアプリケーションの開発、3) 健康啓発・予防医療推進のための住民リーダー人材育成による効果検証のメンバーとしてサブプロジェクトメンバーとともに研究を推進した。特に本研究プロジェクトの基盤となる1) ヘルスケアデータ統合によるプラットフォーム構築に関する研究においてはサブプロジェクトリーダーを兼務し、①高齢者ベースライン調査(8,019 人対象)及び3年後の追跡調査(ベースライン調査回答者を対象)の実施、統括、②壮年期ベースライン調査(6,000 人)及び3年後の追跡調査(ベースライン調査回答者を対象)の実施、統括、③町保有のヘルスケアデータ統合のための町との打ち合わせ等の推進、④広陵町情報公開・個人情報保護審査会の一連の審査に関する各種作業を執り行った。

本研究プロジェクトに参加する研究者は、申請時 10 名であったところ、1 名が交代、1 名が異動により最終的に 9 名での実施体制となった。1 名減員となったが、研究代表者及び開始時からのメンバーであった研究者が担当し進捗に問題はなかった。本研究プロジェクトに参加する研究者はそれぞれサブプロジェクトのいずれかに所属し、サブプロジェクトリーダーを中心に研究を遂行した。各サブプロジェクトのリーダーは、研究代表者と綿密に連携をとりながら、また、自身がマネジメントするサブプロジェクト以外の 1 つ以上のプロジェクトにも参加することにより、相互間の連携を図りつつ、各々の研究を推進した。

博士研究員を 2017 年 9 月～2018 年 7 月まで 1 名、2019 年 4 月～2020 年 3 月まで 1 名を雇用した。博士研究員は、研究代表者及び各サブプロジェクトリーダーの指示により、研究に従事した。各サブプロジェクトのフォローを行なうとともに、ベースライン調査及び追跡調査の解析に特に従事し、本研究に大きく貢献した。本研究のデータ等を用いた大学院生、RA は研究期間内ではいなかったが、研究期間終了後、即ち、研究基盤形成後においてテーマとする者がいた場合でも対応できる体制は整えている。

研究者間の連携については、本研究プロジェクトに携わる研究者全員が見られるメーリングリスト及び共有ファイルにより常時意見交換等ができる体制とした。また、月例会議では必要に応じて各研究者が参加し、研究全体のマネジメントが行われている。広陵町との打ち合わせや月例会議等は事務担当部門である総務部の職員が参加した。

本研究プロジェクトにおいては、研究フィールドとなる奈良県広陵町役場との協働も重要であった。広陵町企画政策課と本学総務部が事務連絡の窓口となっており、広陵町けんこう推進課(保健センター)、介護福祉課(地域包括支援センター)、保険年金課等の各部局と連携をとり協働した。また、広陵町では本研究プロジェクトに関わる部局の責任者等により構成される庁内委員会が 2016 年度より設置されており、大学との協働体制が構築されている。

法人番号	291005
プロジェクト番号	S1591009L

(3) 研究施設・設備等

基本的に大学内において研究は進められており、人材育成に際しては、P 棟 1 階理学療法実習室等の大学施設のほか、広陵町内の公的施設及び民間施設を利用した。

また、研究費のみの申請であったため、研究装置、設備の整備はない。

(4) 研究成果の概要 ※下記、13及び14に対応する成果には下線及び＊を付すこと。

1) ヘルスケアデータ統合によるプラットフォーム構築に関する研究

a) ベースライン調査の実施及び分析

介入前の地域住民の健康及びソーシャル・キャピタルの状況を把握するため、広陵町において、65 歳以上の高齢者調査(2016 年 3 月実施、対象の全住民 8,019 人に配布)と 41～64 歳対象の壮年期調査(2016 年 11～12 月実施、無作為抽出により 6,000 人に配布)の 2 件の質問紙調査を実施した。

結果の分析は、2016 年度は高齢者調査単独データ、2017 年度からは高齢者・壮年期結合データを用いて進められ、本学紀要に本プロジェクトの概要(*論文 1)及び高年齢者ベースライン調査を用いた主観的健康感とソーシャル・キャピタルの関連(*論文 2)、英文論文として同じく高年齢者ベースライン調査を用いた気持ち年齢に関する論文(*論文 3, 4)が掲載された。学会発表としては情報科学技術フォーラム(*1)、日本公衆衛生学会(*2、12、17)、日本健康医学会(*3、18)、日本疫学会(*4)、日本予防理学療法学会(*5)、国際アルツハイマー病協会国際会議(*6)、日本認知症ケア学会(*7)、日本老年医学会(*8、10、15)、日本老年社会科学会(*9)、日本老年看護学会(*11)、日本ポジティブサイコロジー医学会(*13)、情報処理学会(*14)、全国栄養士会(*16)にて、計 18 編発表した。

研究期間内に発表された論文は 4 件、研究発表は 18 件であった。学会発表 18 件のうち、システムに関するものが 2 件、高齢者ベースライン調査の結果を用いたものは 14 件、壮年期ベースライン調査に関する研究発表が 2 件であった。特に高齢者ベースライン調査による成果が大きく、内容についてもソーシャル・キャピタル、認知症、運動機能等、多彩な側面からアプローチされた。今後、追跡調査を踏まえた解析を行っていくこととなる。また、壮年期ベースライン調査に関する研究発表においては、壮年期住民におけるストレスを焦点にあてたものであり、今後、高齢者における特徴と比較するとともに、追跡調査を踏まえた解析も行なう予定である。

b) 追跡調査の実施及び解析

高齢者ベースライン調査に回答のあった 3,866 人のうち、2019 年 1 月 1 日現在で転居、死亡した人等を除く 3,445 人に対し追跡調査を実施した(2019 年 2 月及び 5 月に実施)。また、同様に壮年期ベースライン調査に回答のあった 2,249 人のうち、転居・死亡者等を除く 2,245 人に対して追跡調査を実施した(2019 年 11 月実施)。調査内容は、基本的にベースライン調査に準ずるが、月例会議等において各サブプロジェクトからの意見交換を行い、一部追加した。

高齢者調査(ベースライン及び追跡調査)のデータは、2019 年秋に一元化され、解析に着手した。また、壮年期調査(ベースライン及び追跡調査)のデータは、追跡調査のデータが入力できた後に一元化し解析に着手した。

今後、本研究プロジェクトにより本学及び広陵町の協働によって運営された広陵町介護予防リーダー(KEEP)養成講座、畿央大学認知症カフェ等の認知症施策に関する人材育成、及び畿央大学健康支援学生チーム(TASK)等の参与が地域住民のソーシャル・キャピタル醸成にどの程度関わったのかを解析し検証する。また、高齢者及び壮年期追跡調査においては、上記講座等以外に本学及び本学学生等との関わりの有無についても調査しており、①従来から何らかの地域活動・社会活動等に参加していた群、②本学と広陵町との協働事業がきっかけで地域活動等に参加した群、③未参加群とに分けてソーシャル・キャピタルの醸成、健康度等の比較を行なう予定である。また、ベースライン調査にて解析、発

法人番号	291005
プロジェクト番号	S1591009L

表した内容が 3 年後の追跡調査の結果、縦断的観点からの変化を検討する。

c)ヘルスケアデータの一元化

広陵町と協働して、データ項目の選定を行い、広陵町保有データの学術研究目的による利用の申請を行った。改正個人情報保護法(2017 年 5 月 30 日施行)に伴う手続き変更があったため時間を要したものの、2017 年度に一部のデータ項目について広陵町よりデータ提供を受けることが決定した。2019 年 12 月にはベースライン調査時における KDB データの一部項目について、2020 年 3 月には介護保険データの一部項目及びKEEP(住民リーダー)自身の体力測定の結果について町より提供を受けることができた。今後もデータ提供を受けるために引き続き町と連携し推進していく。一元化するデータは、①KDB データの一部(ベースライン調査年度、追跡調査年度)、②介護保険データの一部(同)、③KEEP(住民リーダー)自身の体力測定の結果であり、①については一元化ができ解析を始めることができたが、②及び③については一元化作業のみとなった。①の追跡調査年度全体にわたる累積データは、2020 年度に開示されることとなっている。

また、受領したデータをベースライン調査及び追跡調査と突合したものをを用い解析を行った。その成果を 2019 年度中にエントリーし 2020 年度前半に開かれる日本老年医学会(*21)にて発表予定である。

d)ハイリスク地域・ハイリスク者の洗い出し

ベースライン調査の結果に基づきハイリスク地域の選定を行なう予定であったが、壮年期調査が当初予定よりも若干遅延したため、その選定及び解析方法を変更した。研究期間内には、新興住宅地域と既存地域における住民の健康状態の相違について解析を行った。解析した情報を広陵町と共有し、研究期間終了後、より詳細な解析を行なう予定である。

また、認知症カフェ、住民リーダー養成及び住民リーダーによる運動教室等を通じた町民全体へのアプローチを行い、追跡調査の結果からハイリスク者の洗い出しを行っていく予定である。

2)健康・認知機能低下の効率的なスクリーニング方法及びそのアプリケーションの開発

a)健康・認知症アプリケーションの開発及び実用性の検証

タブレット端末から利用できる健康・認知症チェック用アプリケーション「きおトレ」のプロトタイプを試作を行った。アプリケーションには一般的な認知機能検査を搭載する予定であったが、利用許諾の関係で新規に開発した。その試作について、認知症ケアに関する他大学の医学系研究者にアプリケーションの内容について意見を求め、内容妥当性の確保とともに質問肢を修正変更した後、アプリケーションを完成させた。認知症アプリケーションにふさわしい名前を募集し、「きおトレ」アプリと命名した。町内の認知症カフェや老人クラブとの関係づくりによって実用性検証のためのフィールドを確保し、アプリケーションの試用を行なうことで、今後の研究基盤を整備した。また、本アプリケーションに関する報告を、2020 年度 5 月開催予定の日本認知症ケア学会(*19, 20)にて行なう予定である。

b)認知症カフェ等の活動

広陵町事業である認知症カフェ(ひまわりカフェ)に研究者及び学生(Orange Project チーム畿央大学)を派遣し、活動支援を行った(2016 年度 6 回、2017 年度 4 回、2018 年度 8 回、2019 年度 6 回)。併せて、RUN 伴(認知症啓発のための全国横断マラソン)など広陵町関連のその他イベントにも研究者、学生、教員が参加し、2018 年度以降は本学教員が広陵町における RUN 伴の実行委員長を務めた。関係者との意見交換を通じて健康・認知機能低下のスクリーニング方法を検討し、健康・認知症アプリケーション開発に反映させた。

法人番号	291005
プロジェクト番号	S1591009L



写真1. ひまわりカフェ(認知症カフェ)



写真2. シニアキャンパス(RUN 伴参加)

c)上記活動を円滑に協働していくための会議

研究者及び広陵町地域包括支援センター職員が参加する会議を定期的(毎月1回定例)に開催し、情報の共有及び意見交換を行った。

3)健康啓発・予防医療推進のための住民リーダー人材育成による効果検証

a)介護予防リーダーの養成および活動支援

全11回から成る介護予防リーダー養成講座を実施した(2015年度受講生15名、2016年度19名、2017年度13名、2018年度6名)。本講座は従来から実施されている介護予防サポーターではなく「リーダー」を育成するというコンセプトにより、これまで99名の認定者を養成している(年齢30代～80代)。大学と地元自治体との連携による養成講座の一例では、座学と実技により構成された講義を週2回×6週間(全12回)実施した。講座内容は「簡易な運動指導に必要と考えられる知識面の座学」、「運動指導の方法を学ぶ実技、および受講者が互いに介護予防に対する考え方や、講座修了後の活動などについて話し合うグループワーク」で構成されており(表1)、講師には保健師・看護師・理学療法士など10名以上の専門職が参加しておた。特に、養成講座の中心となる運動指導に関する部分では医療・介護の現場で勤務している理学療法士を外部講師として招いた(図1)。また養成講座の最終日には筆記試験による認定試験を実施し、合格者に対しては自治体が介護予防リーダーとして認定する形式を取っている。

法人番号	291005
プロジェクト番号	S1591009L

表 1. 介護予防リーダー養成講座カリキュラム

回数	テーマ
第1回	開講式：1.介護予防とは。2.A町における介護予防の現状と課題。 3. 自己紹介とグループワーク
第2回	運動器の仕組みと加齢による影響
第3回	認知症・高齢者のうつについて
第4回	ストレッチングの理論と実際
第5回	筋力増強・持久力向上の理論と実際
第6回	バランス運動の理論と実際
第7回	全身持久力向上の理論と実際
第8回	運動習慣定着に向けた指導方法，現場実習プログラム作成
第9回	介護予防教室現場実習
第10回	高齢者向けレクリエーションの理論と実際
第11回	認定試験・修了式・合格発表・リーダー認定

座学と実技，グループワーク，発表の組み合わせにより一講座90分で構成

受講者の募集の際には、活動目的を明確に示し、講座修了後の地域活動に対する十分な理解が得られる様、実施主体である広陵町の地域包括支援センターと共に事前説明会を実施した。これにより受講希望者と養成側のミスマッチを防ぎ、実際の地域活動が可能な方々に向けた講座であることを確認している。認定者は運動指導、レクリエーション、健康講座など地域のニーズに合わせてこれらを提供できる准専門職的なスキルを有しており、養成後のメンバー間の交流や大学教員・理学療法士など専門職による支援によりフォローアップ講座を月1回、約半年間実施した。フォローアップ講座では、消防署による一般救命講習や地域包括支援センターの職員による介護予防からみたサロン、通いの場についての講義や自立したボランティア集団としての組織構成、地域活動を通じての意見交換会などを行った。

前年度講座修了生（KEEP）へのフォローアップ講座の実施、町と連携して KEEP の活動の場を企画するなど介護予防リーダーの活動支援を行った。フォローアップ講座の内容は KEEP の実施している運動指導内容に対する専門職からの意見出しやオリジナルプログラムの内容確認、補足指導などを年間3回の頻度で行った。また、KEEP と本学健康支援学生チーム（TASK）の合同勉強会・意見交換会を実施し、地域住民と学生の協働の場を設けた。

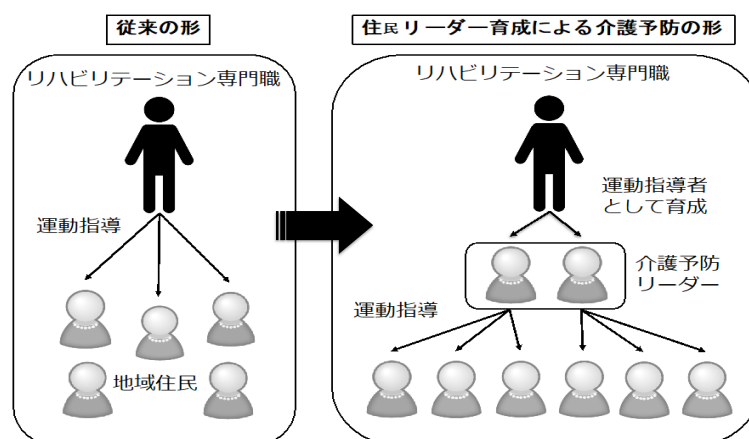


図1. リハビリテーション専門職による介護予防支援のイメージ

b) 認知症サポーターの養成

本学健康支援学生チーム（TASK）、看護系学生、地域住民を対象に認知症サポーター養成講座を実施した（2016年度3回）。2017年度は、認知症カフェに参加する TASK

法人番号	291005
プロジェクト番号	S1591009L

に対してもサポーターとしての講習を実施した。2018 年度は 3 回、2019 年度は 3 回実施した。認知症サポーター養成講座は、全国の認知症キャラバンメイトを中心に一般市民や学生に認知症に関する知識を講義し認知症の啓発を行なうものである。5 年間で 5 回実施したシニアキャンパスでは一般住民へ、学内講義では学生へ、地域のショッピングモール等へ出向いてアウトリーチ型アプローチを展開した。

4) 住民への健康支援を多専門分野で構成される学生チームで行なうことによる教育効果

a) 学生チームの募集および定期活動

本学健康支援学生チーム（TASK）の学生を募集し、2015 年度 5 学科 75 名、2016 年度 100 名、2017 年度 170 名、2018 年度 162 名、2019 年度 156 名が登録した。定期活動として、学科横断型のメンバーが企画し、地域実践につながる内容の勉強会を月 1 回開催した。広陵町けんこう推進課（保健センター）や介護福祉課主体の住民を対象とした地域事業に参加し、健康支援に関わった（表 2, 3）（写真 3, 4）。また、住民リーダー・行政職員と協働・交流し、地域に求められていることとは何か、など実際の声を聴く機会を得た。

表 2. 2017 年度の学生チームの勉強会の内容（例）

勉強会	日付	内容
1	2017/4/17	骨と栄養との関係
2	2017/5/18	体力測定
3	2017/6/21	応急救護
4	2017/6/23	認知症セミナー
5	2017/7/13	ヨガ体験
6	2017/8/13	正しい筋トレの方法
7	2017/9/27	疲れ目解消法
8	2017/10/26	食育 SAT システム
9	2017/11/16	高齢者体験
10	2017/12/21	家庭内事故を防ぐ住まいづくり

表 3. 2017 年度の実践活動の内容

活動	日付	内容
1	2017/4/22	広陵町身体体力測定会(保健センターと共同)
2	2017/6/18	認知症カフェ(認知症班と共同)
3	2017/8/6	いのちを守るイベント(保健センターと共同)
4	2017/10/22	畿央祭ウエルカムキャンパス
5	2017/10/28	広陵町身体体力測定会(保健センターと共同)
6	2017/12/17	認知症カフェ(認知症班と共同)
7	2018/1/21	認知症カフェ(認知症班と共同)
8	2018/2/18	認知症カフェ(認知症班と共同)
9	2018/2/23	第 3 回シニアキャンパス(KEEP と共同) (地域包括支援センターと共同)
10	2018/3/13	介護予防リーダー養成講座(KEEP と共同) (地域包括支援センターと共同)

法人番号	291005
プロジェクト番号	S1591009L



写真 3. 勉強会の様子（第 8 回）



写真 4. 実践活動の様子（第 5 回）

b)教育効果の測定

自主勉強会や地域実践活動を通して、どのような教育効果が得られるかについて、以下の 3 点を行った。

①TASK 学生の代表者にヒアリングを実施

（ヒアリングの一部）

- ・私たちにとって、当たり前の言葉も、他学科の学生にとっては難しく伝わりにくいことがわかりました。
- ・他学科の友だちと学び合う中で、考え方や捉え方に違いがあると知ったのは、新しい発見でした。
- ・これまで知らない人と話すことがほとんどなかったので、社会勉強になりました。
- ・高齢者の方々は僕たちと同じように見えていたわけではないことに気が付きました。それからは、高齢者の目線でわかるようになりました。

②継続的に情報収集及びレビューを行い、評価指標として、ヘルスリテラシー・保健行動チェックリスト等を検討した。調査方法として、在学生への調査自体が、教員から評価されているという意識に繋がり、学生の主体性が損なわれる可能性があると考え、卒業生へのヒアリングなど調査可能なネットワーク作りを進めている。

③追跡調査（高齢者、壮年期の双方）に学生チームとの関わりの有無についての設問を追加することにより、学生による住民への効果について更なる解析を進める準備を整えた。

＜優れた成果が上がった点＞

本研究プロジェクトにおける根幹の一つである、ヘルスケアデータの一元化について、大学と自治体が協力し、大学主体の住民調査と自治体保有のヘルスケアデータの一部について、個人情報保護が十分配慮された環境下で一元化できたことは、大きな成果と言える。

また、ベースライン調査及び 3 年後追跡調査の完遂、広陵町と協働した 5 回にわたるシニアキャンパスの実施、介護予防リーダー養成講座及び認知症カフェ、学生健康支援チームの活動継続も、ソーシャル・キャピタル醸成の可視化に寄与するものである。

ベースライン調査の結果を地域住民にフィードバックするため、広陵町広報誌に 5 回にわたる連載記事を掲載した。これにより本研究プロジェクト及びソーシャル・キャピタルと健康との関連性に関する周知を行なうことができ、研究の推進及び町民の健康増進に寄与できたと考えられる。

＜課題となった点＞

個人情報保護法の改正により、広陵町保有データの提供についての手続きが遅れたことにより、一元化には到達できたもののデータ解析により新たな健康政策への提言には

法人番号	291005
プロジェクト番号	S1591009L

至らなかった。また、当初計画であった健康啓発・予防医療推進のための住民リーダー人材育成による効果検証及び医療費・介護保険費削減の効果検証が研究期間内に遂行できなかった。介入地域の選定については、新興住宅地域と既存地域の特徴が明らかとなったため、それをもとにし、より詳細なその際は、可視化できるよう GIS を用いたマッピング等の手段を用いることとしたが、いくつかの要素があり、小学校区での特徴は進展しなかった。代替手段として、研究期間中に認知症カフェや介護予防リーダーの参画するイベント等に参加した住民を介入群とし、追跡調査の解析を行なうことで、介入成果及びハイリスク者の洗い出しを行なうよう変更した。

＜自己評価の実施結果と対応状況＞

各年度初めにヘルスプロモーションセンター会議において、前年度進捗及び当該年度計画について、報告及び審議を行なった。

また、自己評価として本学健康科学部長及び健康科学研究所長より 3 年目と最終年度に内部評価を受けた。評価項目は研究プロジェクトの目的・意義、計画の概要、研究組織、研究成果の概要の 3 点とした。最終年度の内部評価については、2 名中 1 名は高評価であった。2 名中 1 名は当初の目的があまり達成されていないとの評価であり、自治体との共同作業の難しさに言及した上で、当初計画からの乖離及び計画修正についての問題点と認知症アプリ、住民、自治体からのフィードバックについての指摘があった。特に、一元化については、自治体との共同作業の難しさに直面した際、不完全なままで終了するより計画を途中で変更することも必要だったとの指摘であった。

当初計画からの乖離及び計画修正については、個人情報保護法の改正と自治体との共同作業による遅延によるものであり事業期間終了後にもデータ一元化に対応していく。フィードバックについては事業期間中に引き続き、終了後も適宜行っていく地域住民へのフィードバックは今後行政側との協議の上、広報や講演等の手段にて検討していく。

＜外部(第三者)評価の実施結果と対応状況＞

学術的な側面から公立医科大学副学長（公衆衛生学）及び公立大学副学長（看護学）より 3 年目と最終年度に外部評価を受けた。また、行政的な側面から近隣の 2 自治体（介護福祉課と高齢対策課）より 3 年目と最終年度に外部評価を受けた。

評価項目は、自己評価項目と同じく 3 点であり、概ね達成できているとの評価であった。大学・行政・地域間のネットワーク・連携を活かした継続的活動と研究成果の発展が期待された。事業期間内に着手できなかった事項については適切に記述されているとの評価であった。

＜研究期間終了後の展望＞

本研究プロジェクトの協働のパートナーである広陵町と協議をしながら、以下の点について研究を推進する予定である。また、今後の方向性は健康日本 21（第 2 次）及び 2015 年に国連総会にて採択された SDGs の目標を広陵町においても推進できるよう、特に健康格差の解消に力を入れながら推進していきたいと考えている。

1) ヘルスケアデータ一元化について

ヘルスケアデータ一元化について、ベースライン調査時における国保加入者の KDB システムの一部データを広陵町からの提供を受けたことにより、今後、突合作業を行ない、ベースライン調査項目が各種疾病の罹患等に影響を及ぼしているかを明らかにするための解析に入る。

また、追跡調査年度における KDB システムの一部データは、単年度のデータを集計す

法人番号	291005
プロジェクト番号	S1591009L

る性格上、その集計そのものが完了した 2020 年夏以降に提供を受ける予定である。また、ベースライン調査時及び追跡調査時の介護保険データ、KEEP 参加者のデータにおいては広陵町との協議の上、KDB データ同様、順次提供を受ける予定である。提供を受けたデータは個人情報のないものであり、本研究固有の ID によってのみ突合できるものであるが、提供を受けた後は速やかに学内において突合し、順次解析に入る予定である。

2) 高齢者及び壮年期追跡調査の解析

2019 年度をもって、高齢者及び壮年期ベースライン調査・追跡調査を完遂することとなったが解析は研究期間終了後となった。研究代表者及び各サブプロジェクトリーダーが連携し、1) で得られたヘルスケアデータと突合したデータを用いて解析するもの、住民調査のみにて解析できるもの両方について当初の研究計画に沿った形で研究を継続して推進することとする。

3) 認知機能アプリについて

「きおトレ」アプリは数次の改修の後、完成に至った。今後は、完成した「きおトレ」アプリの精度を高めるため、認知症カフェや認知症啓発イベントにおいて試用を繰り返し、さらに改修を加える。そして、活用方法については、認知症初期集中支援チームや認知症専門医への紹介率や受診率の増加をアウトカム評価として認知症の早期発見に繋がるようにシステム化していく検討をする予定である。その際には、学生ボランティア「Orange Project チーム畿央大学」の学生らとともに各イベントに参画し、「認知症に優しい町 広陵町・認知症につよい大学 畿央大学」をめざした次世代の人材育成に貢献する。

4) 地域住民を対象とした介護予防リーダー養成講座、身体体力測定会等について

地域住民を対象とした介護予防リーダー養成講座受講者に対する体力測定データは、効果検証の内容の一つとする予定であったが、広陵町からの提供が遅れているため実施できていない現状にある。早急に提供を受け、その解析を優先的に行うこととする。

また、地域住民を対象とした介護予防リーダー養成講座、身体体力測定会等について、研究期間終了後は、その内容及び規模、予算、人員等、様々な点を広陵町と協議することとする。その際、地域住民の利益になり、また、大学、自治体双方が同等の利益を享受できる方向性を担保するようにする。

5) その他

広陵町に最終報告会を行い、事業終了後の展望について話し合う機会を設けた。また、地域住民への報告の機会は自治体側と協力しながら検討していく。

<研究成果の副次的効果>

介護予防リーダー養成による成果をはじめとした、本研究プロジェクトによる成果を広陵町第 7 期介護保険計画等の各種行政計画に一部反映することができた。また、第 10 回東アジア地方政府会合にて広陵町が本研究プロジェクトを含めて発表したことにより、本研究プロジェクトが地方政府レベルにおいて全国的に周知することができた。また、本学健康支援学生チーム (TASK) と認知症啓発プロジェクトチーム (Orange Project) は広陵町との連携協働が強化され、学生の健康に関する関心度や高齢者に対する対応能力も向上した。

12 キーワード(当該研究内容をよく表していると思われるものを8項目以内で記載してください。)

(1) ソーシャル・キャピタル

(2) データ一元化

(3) 介護予防

(4) 認知症啓発

(5) 学生との協働

(6) 人材育成

法人番号	291005
プロジェクト番号	S1591009L

(7) _____ (8) _____

13 研究発表の状況(研究論文等公表状況。印刷中も含む。)

上記、11(4)に記載した研究成果に対応するものには*を付すこと。

<雑誌論文>

- 1) *高取克彦. 住民主体の介護予防促進とソーシャル・キャピタルの醸成. 畿央大学紀要, 14 (2), 1-5, 2017 (総説)
- 2) *文鐘聲, 松本大輔, 山崎尚美, 高取克彦, 宮崎誠. 地域在住高齢者におけるソーシャル・キャピタル及び社会経済的状態と主観的健康感との関連-KAGUYA プロジェクトベースライン調査. 畿央大学紀要, 15 (1), 11-19, 2018
- 3) *Takatori K, Matsumoto D, Miyazaki M, Yamasaki N, Moon JS. Relationship between Self-Perceived Age and Social Activity in Older Japanese Adults: The KAGUYA Study” has been accepted for publication. Health 10, 1459-1473, 2018
- 4) *Takatori K, Matsumoto D, Miyazaki M, Yamasaki N, Moon JS. The difference between self-perceived and chronological age in the elderly may correlate with general health, personality and the practice of good health behavior: A cross-sectional study. Archives of Gerontology and Geriatrics 83, 13-19, 2019

<図書>

なし

<学会発表>

- 1) *宮崎誠, 山崎尚美, 高取克彦, 松本大輔, 文鐘聲. 地域包括ケアシステム研究のためのヘルスケア統合データベースの構築. 第15回情報科学技術フォーラム, 2016年9月, 富山市
- 2) *文鐘聲, 松本大輔. 高齢者のソーシャル・キャピタルと健康-KAGUYA プロジェクトベースライン調査. 第75回日本公衆衛生学会, 2016年10月, 大阪市
- 3) *文鐘聲. 地域在住高齢者のソーシャル・キャピタルと抑うつ-KAGUYA プロジェクトベースライン調査. 第27回日本健康医学会, 2016年11月, 東京都
- 4) *文鐘聲, 松本大輔, 高取克彦, 山崎尚美, 宮崎誠. 地域在住高齢者のソーシャル・キャピタルと主観的健康感-KAGUYA プロジェクトベースライン調査. 第27回日本疫学会, 2017年1月, 山梨市
- 5) *高取克彦, 松本大輔, 宮崎誠, 山崎尚美, 文鐘聲. 地域高齢者における主観的健康感と自覚的年齢及び既往疾患との関係-KAGUYA プロジェクト. 第2回日本予防理学療法学会サテライト集会, 2017年3月, 名古屋市
- 6) *Yamasaki N, Moon JS, Takatori K, Matsumoto D, Miyazaki M, Fukumori M, Nanbu T, Shimaoka M, Terada M, Yoshida H, on behalf of KAGUYA Project Team. The current state of the recognition and the issue for dementia with older people in Nara, Japan: KAGUYA Project baseline survey. 第32回国際アルツハイマー病協会国際会議, 2017年4月, 京都市
- 7) *山崎尚美, 文鐘聲, 高取克彦, 松本大輔, 宮崎誠, 南部登志江, 島岡昌代, 寺田美和子, 福森貢, 吉田浩子. A町の高齢住民の認知症に関する準備性-KAGUYA プロジェクト高齢者ベースライン調査. 第18回認知症ケア学会, 2017年5月, 沖縄県
- 8) *文鐘聲, 高取克彦, 山崎尚美, 松本大輔, 宮崎誠. 地域在住高齢者のソーシャル・キャピタルと抑うつとの関連. 第59回日本老年医学会, 2017年6月, 名古屋市
- 9) *文鐘聲, 山崎尚美, 高取克彦, 松本大輔, 宮崎誠, 吉田浩子. 新興住宅地域と旧

法人番号	291005
プロジェクト番号	S1591009L

- 村地域におけるソーシャル・キャピタルと健康の地域間格差—KAGUYA プロジェクト
高齢者ベースライン調査. 第 59 回日本老年社会科学会, 2017 年 6 月, 名古屋市
- 10) *高取克彦, 松本大輔, 宮崎誠, 山崎尚美, 文鐘聲. 地域高齢者における自己認識
年齢と健康関連指標および日常生活活動能力との関係. 第 59 回日本老年医学会, 2017
年 6 月, 名古屋市
 - 11) *山崎尚美, 文鐘聲, 高取克彦, 松本大輔, 宮崎誠, 南部登志江, 島岡昌代, 寺田
美和子, 福森貢, 松本泉美, 吉田浩子. 高齢住民のエンパワーメント力と認知症の
認識との関連性—KAGUYA プロジェクト高齢者ベースライン調査. 第 22 回日本老年看
護学会, 2017 年 6 月, 名古屋市
 - 12) *文鐘聲, 松本大輔. 地域住民のソーシャル・キャピタルと主観的健康感—KAGUYA
プロジェクト. 第 76 回日本公衆衛生学会, 2017 年 10 月, 鹿児島市
 - 13) *高取克彦, 松本大輔, 宮崎誠, 山崎尚美, 文鐘聲. 地域高齢者の運動習慣形成に
影響する心理的要因の検討: KAGUYA プロジェクト. 第 6 回日本ポジティブサイコロ
ジー医学会学術集会, 2017 年 11 月, 東京都
 - 14) *宮崎誠, 山崎尚美, 高取克彦, 松本大輔, 文鐘聲. 認知機能自己チェックアプリ
ケーション「きおトレ」の開発. 情報処理学会第 80 回全国大会, 2018 年 3 月, 東京
都
 - 15) *文鐘聲, 串田修, 松本大輔, 山崎尚美, 高取克彦, 宮崎誠. 地域在住高齢者にお
ける朝食欠食と生活機能との関連. 第 60 回日本老年医学会学術集会, 2018 年 6 月,
京都府
 - 16) *串田修, 文鐘聲, 松本大輔, 山崎尚美, 高取克彦, 宮崎誠. 同居者のいる地域在
住高齢者における共食有無と健康状態との関連. 平成 30 年度全国栄養士大会, 2018
年 7 月, 横浜市
 - 17) *文鐘聲, 松本大輔. 地域在住壮年期住民の心理的ストレスに関連する要因—KAGUYA
プロジェクト. 第 78 回日本公衆衛生学会総会, 2019 年 10 月, 高知県
 - 18) *文鐘聲. 地域在住壮年期住民における互酬性の規範の実践が主観的健康感に及ぼ
す影響—KAGUYA プロジェクト壮年期ベースライン調査—, 第 29 回日本健康医学会総
会, 2019 年 11 月, 兵庫県
 - 19) *山崎尚美, 荒木智子, 福森貢, 島岡昌代, 上仲久, 杉本多加子, 今西綾. 認知機
能スクーリングアプリ「きおトレ」の作成. 第 21 回日本認知症ケア学会大会, 2020
年 5 月, 宮城県 (予定) (採択済)
 - 20) *上仲 久, 荒木 智子, 山崎 尚美, 島岡 昌代, 杉本 多加子. 認知機能スクーリングア
プリ開発に関する文献的考察, 第 21 回日本認知症ケア学会大会, 2020 年 5 月, 宮城
県 (予定) (採択済)
 - 21) *文鐘聲, 荒木智子, 松本大輔, 福森貢, 高取克彦, 山崎尚美, 後藤尚子, 吉崎京
子. 国保加入前期高齢者における特定健診未受診に関連する要因. 第 62 回日本老年
医学会学術集会, 2020 年 6 月, 東京都 (予定) (採択済)

法人番号	291005
プロジェクト番号	S1591009L

＜研究成果の公開状況＞(上記以外)

シンポジウム・学会等の実施状況、インターネットでの公開状況等

＜既に実施しているもの＞

- 1) KAGUYA プロジェクトホームページ <https://kaguya.kio.ac.jp/>
- 2) 畿央大学シニアキャンパス ロコモと認知症の意外な関係. 2015 年 12 月, 畿央大学. <https://kaguya.kio.ac.jp/news/2015/1207/>
- 3) 第 2 回畿央大学シニアキャンパス シニア世代のためのオープンカレッジ～地域のつながりと健康～ (平成 27, 28 年度進捗報告会含). 2017 年 2 月, 畿央大学. <https://kaguya.kio.ac.jp/news/2017/0220-2/>
- 4) 第 3 回畿央大学シニアキャンパス シニア世代のためのオープンカレッジ～認知症について考えよう～ (平成 29 年度進捗報告会含). 2018 年 2 月, 畿央大学 <https://kaguya.kio.ac.jp/news/2018/0223/>
- 5) 特集 KAGUYA プロジェクト～「健康」で「長寿」なまちへのスタートライン 突然ですがあなたは「健康」ですか?. 広報こうりょう平成 29 年 12 月 1 日号. 759, 2-3, 2017
- 6) 連載第 2 弾 KAGUYA プロジェクト～「健康」で「長寿」なまちへのスタートライン. 広報こうりょう平成 30 年 1 月 1 日号. 特集 760, 4-5, 2018.
- 7) 連載第 3 弾 KAGUYA プロジェクト～「健康」で「長寿」なまちへのスタートライン. 広報こうりょう平成 30 年 2 月 1 日号. 761, 6-7, 2018.
- 8) 連載第 4 弾 KAGUYA プロジェクト～「健康」で「長寿」なまちへのスタートライン. 広報こうりょう平成 30 年 3 月 1 日号. 762, 4-5, 2018.
- 9) 最終回 KAGUYA プロジェクト～「健康」で「長寿」なまちへのスタートライン. 広報こうりょう平成 30 年 4 月 1 日号. 763, 8-9, 2018.
- 10) 第 4 回畿央大学シニアキャンパス. 2018 年 10 月, 畿央大学 https://www.kio.ac.jp/topics_news/34838/
- 11) 第 10 回東アジア地方政府会合分科会, 2019 年 8 月, 広陵町
- 12) 第 5 回畿央大学シニアキャンパス. 2019 年 10 月, 畿央大学
- 13) 第 10 回東アジア地方政府会合, 2019 年 11 月, 奈良市

＜これから実施する予定のもの＞

- 1) 認知症カフェ(ひまわり Café)での認知症アプリ「きおトレ」の試用, 2020 年
- 2) 学生ボランティアチーム「Orange Project チーム畿央大学」の運営, 2020 年
- 3) 広陵町への報告会, 2020 年

14 その他の研究成果等

特になし。

法人番号	291005
プロジェクト番号	S1591009L

15 「選定時」及び「中間評価時」に付された留意事項及び対応

<「選定時」に付された留意事項>

地域密着型研究のモデルケースとなるよう研究を推進して頂きたい。

<「選定時」に付された留意事項への対応>

研究の推進にあたっては、広陵町との協働関係の下、地域住民がアンケート調査や町内外で活用できる認知症アプリケーションの開発、住民リーダーとして研究プロセスにおいて重要な役割を果たした。また、大学を含めた地域全体で本研究を推進した。特に、2017 年に京都府で開催された第 32 回アルツハイマー病協会国際会議及び 2019 年に奈良県にて開催された第 10 回東アジア地方政府会合において広陵町の取組みが発表され、本研究についても国内外の研究者や日本国内の地方自治体を含め広く東アジア諸国に紹介することができた。

<「中間評価時」に付された留意事項>

特になし。

<「中間評価時」に付された留意事項への対応>

特になし。

法人番号	291005
プロジェクト番号	S1591009L

16 施設・装置・設備・研究費の支出状況(実績概要)

(千円)

年度・区分		支出額	内 訳						備 考
			法 人 負 担	私 学 助 成	共同研 究機関 負担	受託 研究等	寄付金	その他()	
平成 27 年度	施 設	0	0						
	装 置	0	0						
	設 備	3,282	3,282						
	研究費	4,718	4,718						
平成 28 年度	施 設	0	0						
	装 置	0	0						
	設 備	195	195						
	研究費	7,805	7,805						
平成 29 年度	施 設	0	0						
	装 置	0	0						
	設 備	0	0						
	研究費	1,742	1,742						
平成 30 年度	施 設	0	0						
	装 置	0	0						
	設 備	0	0						
	研究費	5,575	5,575						
令和 元 年度	施 設	0	0						
	装 置	0	0						
	設 備	0	0						
	研究費	3,896	3,896						
総 額	施 設	0	0	0	0	0	0	0	
	装 置	0	0	0	0	0	0	0	
	設 備	3,477	3,477	0	0	0	0	0	
	研究費	23,736	23,736	0	0	0	0	0	
総 計		27,213	27,213	0	0	0	0	0	

17 施設・装置・設備の整備状況 (私学助成を受けたものはすべて記載してください。)

《施 設》(私学助成を受けていないものも含め、使用している施設をすべて記載してください。)

(千円)

施 設 の 名 称	整備年度	研究施設面積	研究室等数	使用者数	事業経費	補助金額	補助主体
		該当なし					

※ 私学助成による補助事業として行った新增築により、整備前と比較して増加した面積

㎡

法人番号	291005
プロジェクト番号	S1591009L

《装置・設備》（私学助成を受けていないものは、主なもののみを記載してください。）

(千円)

装置・設備の名称	整備年度	型 番	台 数	稼働時間数	事業経費	補助金額	補助主体
(研究装置)							
				h			
				h			
				h			
				h			
(研究設備)				h			
				h			
				h			
				h			
				h			
(情報処理関係設備)				h			
				h			
				h			
				h			
				h			

該当なし

18 研究費の支出状況

(千円)

年 度	平成 27 年度			
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳		
		主 な 使 途	金 額	主 な 内 容
教 育 研 究 経 費 支 出				
消 耗 品 費	694	アプリ・DB開発	426	iPadAir 8台
		研究要旨説明	99	KAGUYAプロジェクト宣伝用リーフレット
		その他	169	チューブファイル他
報酬・委託料	3,540	データ測定・運営補助	20	シニアキャンパス 学生ボランティア謝金×10名
		データ測定・運営補助	20	シニアキャンパス 被験者謝金×10名
		アンケート調査	3,500	アンケート調査業務委託
賃借料	200	データ測定	200	体力測定フィードバックシステムライセンス料
印刷製本費	214	介入者育成	214	介護予防リーダーテキスト 200部
旅費交通費	70	連携自治体打合	1	広陵町周辺出張 1名3回
		情報収集	69	ワークショップ参加旅費 2名1回
計	4,718			
ア ル バ イ ト 関 係 支 出				
人件費支出 (兼務職員)				
教育研究経費支出				
計	0			
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)				
教育研究用機器備品	3,282	資料保管	148	モバイルPC×1台
		データ測定	1,440	超音波骨密度測定装置×1台
		データ測定	583	マルチ周波数体組成計
		アプリ・DB開発	144	SurfacePro4
		アプリ・DB開発	602	MacPro
		アプリ・DB開発	365	MacBookPro
計	3,282			
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出				
リサーチ・アシスタント				
ポスト・ドクター				
研究支援推進経費				
計	0			

法人番号	291005
プロジェクト番号	S1591009L

年 度	平成 28 年度	積 算 内 訳		
小 科 目	支 出 額	主 な 内 容		
		主 な 使 途	金 額	主 な 内 容
教 育 研 究 経 費 支 出				
消 耗 品 費	1,185	認知症スクリーニング方法開発	765	デジカメ2点、ICレコーダー2点、モバイルプリンター2点他
		認知症スクリーニング方法開発	320	SPSS Based、SPSS Advanced 他
		研究成果公表	42	トンボ 鉛筆、付箋、マルチカード 他
		その他	58	iPadスタンド、ファイル 他消耗品
図書資料費	22	データ一元化調査	22	個人情報保護法の知識 他計6冊
報酬・委託料	6,227	データ測定・運営補助	3	運動指導補助謝礼×3名
		データ測定・運営補助	104	体力測定会、認知所カフェ 学生ボランティア謝金×48名
		データ測定・運営補助	28	シニアキャンパス 被験者謝金×14名 (KEEP・TASK)
		アンケート調査	3,693	壮年期アンケート調査
		研究成果公表	400	ホームページ制作
		認知症アプリ開発	1,944	KAGUYA認知機能評価支援アプリ開発
		その他	55	日英翻訳、基礎講座eラーニング4点セット
賃借料	54	体力測定用	54	血圧脈波検査装置レンタル
印刷製本費	119	介入者育成	119	介護予防リーダーテキスト増刷 50冊
諸会費	56	研究成果公表	56	日本公衆衛生学会 他4名6回
旅費交通費	142	連携自治体打合	6	広陵町周辺出張 2名7回
		研究成果公表	136	学会発表旅費 4名10回
計	7,805			
ア ル バ イ ト 関 係 支 出				
人件費支出 (兼務職員)				
教育研究経費支出				
計	0			
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)				
教育研究用機器備品	195	認知機能評価支援アプリ対応用	195	デスクトップPC×1台
計	195			
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出				
リサーチ・アシスタント				
ポスト・ドクター				
研究支援推進経費				
計	0			

法人番号	291005
プロジェクト番号	S1591009L

年 度	平成	29 年度		
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳		
		主 な 使 途	金 額	主 な 内 容
教 育 研 究 経 費 支 出				
消 耗 品 費	156	認知症カフェ運営	80	認知症カフェ消耗品、看板材料 他
		その他	76	複合機、カートリッジ、ボンシクロス 他
図書資料費	27	データ一元化調査	27	書籍 知的機能検査の手引き 他計11冊
報酬・委託料	555	データ測定・運営補助	26	認知症カフェ 学生ボランティア謝金×13名
		データ測定・運営補助	103	体力測定 学生ボランティア謝金×55名
		データ測定・運営補助	128	シニアキャンパス 被験者謝金×17名 外部講師謝礼×1名
		アプリ開発	87	スーパーバイス 謝礼 他
		研究成果公表	27	ホームページ改定
		その他	184	認知症カフェ看板製作、論文投稿(校閲)
賃借料	116	体力測定用	108	血圧脈波検査装置レンタル
		研究成果公表	8	学会発表 レンタカー代
印刷製本費	155	介入者育成	155	介護予防リーダーテキスト第2版 60冊
諸会費	155	研究成果公表	155	ADI2017 他5名11回
旅費交通費	565	連携自治体打合	88	広陵町周辺出張 3名15回 愛媛大学出張 2名2回
		研究成果公表	476	学会発表旅費 5名16回
		その他	1	文献収集、被験者の募集、打合せ
その他経費	13	データプラットフォーム作成	13	Apple Developer Program
計	1,742			
ア ル バ イ ト 関 係 支 出				
人件費支出 (兼務職員)				
教育研究経費支出				
計	0			
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)				
教育研究用機器備品				
計	0			
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出				
リサーチ・アシスタント				
ポスト・ドクター	1,258	ポスト・ドクター1名	1,258	ポスト・ドクター1名雇用(学内)
研究支援推進経費				
計	1,258			

法人番号	291005
プロジェクト番号	S1591009L

年 度	平成	30	年度		
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳			
		主 な 使 途	金 額	主 な 内 容	
教 育 研 究 経 費 支 出					
消 耗 品 費	8	データ測定	8	データ保存用USB他	
図書資料費	38	データ一元化調査	38	書籍 社会関係資本の地域分析他計13冊	
報酬・委託料	4,705	データ測定・運営補助	76	体力測定 学生ボランティア謝金×42名	
		データ測定・運営補助	159	シニアキャンパス他補助謝金、外部講師謝礼	
		データ測定	2,999	第2回高齢者アンケート	
		アプリ開発	1,047	KAGUYA認知機能評価支援アプリ改修	
		中間評価	67	事業中間評価外部評価員謝礼×2名	
		研究成果公表	65	ホームページ改修	
		研究成果公表	138	国際学術雑誌掲載料	
		その他	154	英文校正他	
賃借料	108	体力測定用	108	血圧脈波検査装置レンタル	
印刷製本費	121	介入者育成	121	介護予防リーダーテキスト第3版 30冊	
諸会費	78	研究成果公表	78	学会参加費 6名6回 他	
旅費交通費	342	研究成果公表	342	学会発表旅費 5名18回	
その他経費	175	データ測定	175	データマッピングソフトライセンス他	
計	5,575				
ア ル バ イ ト 関 係 支 出					
人件費支出 (兼務職員)					
教育研究経費支出					
計	0				
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)					
教育研究用機器備品					
計	0				
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出					
リサーチ・アシスタント					
ポスト・ドクター	691	ポスト・ドクター1名	691	ポスト・ドクター1名雇用(学内)	
研究支援推進経費					
計	691				

法人番号	291005
プロジェクト番号	S1591009L

年 度	令和 元 年度	積 算 内 訳		
小 科 目	支 出 額	主 な 使 途	金 額	主 な 内 容
教 育 研 究 経 費 支 出				
消 耗 品 費	810	データ測定	677	認知症アプリ用タブレット他
		介入者育成	133	認知症啓発活動消耗品
図書資料費	8	データ一元化調査	8	学会抄録集
報酬・委託料	2,379	介入者育成	52	認知症啓発活動補助謝礼
		データ測定・運営補助	71	体力測定 学生ボランティア謝金×40名
		データ測定	1,975	第2回壮年期アンケート
		アプリ開発	215	KAGUYA認知機能評価支援アプリ改修
		外部評価	66	外部評価員謝礼×2名
賃借料	109	体力測定用	109	血圧脈波検査装置レンタル
印刷製本費	36	研究成果公表	36	論文別刷り
諸会費	62	研究成果公表	27	学会参加費 1名3回
		介入者育成	35	認知症啓発活動参加費
旅費交通費	152	情報収集	152	学会参加、セミナー産、打合せ旅費 4名
その他経費	504	データ分析	504	分析ソフトバージョンアップ 4名
計	4,060			
ア ル バ イ ト 関 係 支 出				
人件費支出 (兼務職員)				
教育研究経費支出				
計	0			
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)				
教育研究用機器備品				
計	0			
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出				
リサーチ・アシスタント				
ポスト・ドクター	2,374	ポスト・ドクター1名	2,374	ポスト・ドクター1名雇用(学内)
研究支援推進経費				
計	2,374			

KAGUYA プロジェクト リーフレット

畿央大学は、
広陵町の健康づくり、
まちづくりに貢献します。

若者と高齢者が世代をこえて
元気でいきいきと暮らせる
広陵町をめざします。

広陵町×畿央大学 KAGUYA プロジェクト

Keeping Active across Generations Uniting the Youth and the Aged

このプロジェクトは、若者と高齢者が一丸となり、世代をこえて、
住民が元気で生き生きとし続けられるまちづくりをめざす取り組みです。



KAGUYA プロジェクトって？

畿央大学は地元広陵町と連携し、運動教室や体力測定、介護予防、認知症施策などさまざまな健康増進のための人材育成や施策を進めています。その実績もふまえて、文部科学省の補助金である「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に畿央大学が奈良県で初めて採択されました。この助成を受けて、健康に強いまちづくりと実践教育・研究をコラボした「KAGUYA プロジェクト」を平成 27 年度よりスタートすることになりました。

「KAGUYA」の意味って？

KAGUYA（かぐや）は“Keeping Active across Generations Uniting the Youth and the Aged”の略称で、「若者と高齢者が一丸となり、世代をこえて、住民が元気で生き生きとし続けられるまちづくりをめざす」という想いが込められています。また広陵町の竹取公園は竹取物語で有名なかぐや姫誕生の地と言われていることから「KAGUYA プロジェクト」という愛称がつけられることになりました。

KAGUYA プロジェクトがめざすのは？

KAGUYA プロジェクトは、広陵町と協働して地域の健康情報をまとめたデータベース構築を進め、広陵町介護予防リーダー（KEEP）養成講座、畿央大学認知症カフェ等の認知症施策に関する人材育成を行い、畿央大学の健康支援学生チーム（TASK）等とともに、住民の健康増進および介護・認知症施策に寄与するプロジェクトです。＜具体的な活動内容・詳細については中面をご覧ください＞

主な研究テーマ

- ▶ ヘルスケアデータ統合プラットフォーム構築に関する研究
- ▶ 健康・認知症の効率的なスクリーニング方法およびそのアプリケーションの開発
- ▶ 健康啓発・予防医療推進・認知症予防のための住民リーダー人材育成の効果検証
- ▶ 住民への健康支援が他専門分野から構成される学生チームに与える教育効果

この事業は、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 27 年度～平成 31 年度）「ソーシャル・キャピタル創出とヘルスケアデータ一元化による地域包括ケアシステム研究拠点の形成」の助成を受けて実施されます。

畿央大学ヘルスプロモーションセンター

Kio 畿央大学
KIO UNIVERSITY

〒 635-0832 奈良県北葛城郡広陵町馬見中 4-2-2 TEL : 0745-54-1601

Mail : hpc@kio.ac.jp facebook: <https://www.facebook.com/kaguyaproject>

畿央大学の学生や教員が、皆さんと一緒に広陵町を盛り上げます！

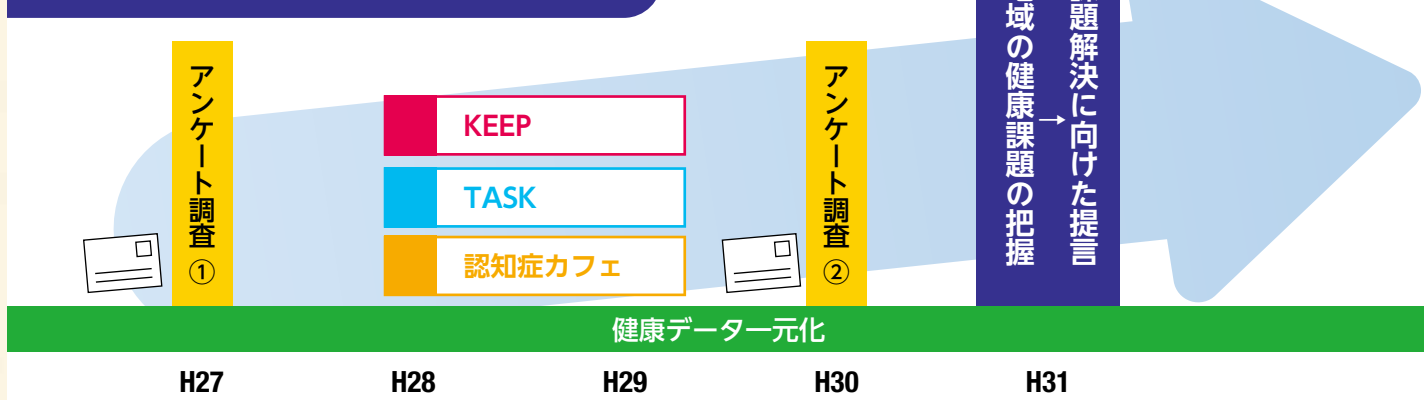
KAGUYA プロジェクトは、健康と教育のプロを育てる畿央大学が、皆さんの健康を支援しながら「元気になるヒケツ」を探る“地域密着型研究プロジェクト”です。

近年、健康は個人の努力だけではなく、「地域の力」「社会の力」も重要だと言われています。地域のつながりや、社会経済的要因が健康に影響を及ぼすことも明らかになってきました。KAGUYA プロジェクトでは、地域で活躍する学生ボランティアや住民リーダーを育てながら、さまざまな健康データを集めてその関係を調査することで広陵町の健康状況を「見える化」し、「どんな要因が健康に影響するのか」を探る全国でも珍しい取り組みです。健康に強いまちづくりをめざして、皆さんと一緒に広陵町を盛り上げませんか？

- あなたの健康上の不安を解決します！
各種イベントに参加すればあなたの健康がチェックできて、専門職からのアドバイスも受けられます。
- 新たな出会いが、あなたを元気に！
教員や学生、住民ボランティアが広陵町で活動して、地域の中での人的交流を活発にします。
- つながりが広げる、元気の輪！
地域との“つながり”がどれくらいあなたの健康や生きがいにつながるのかを調べます。



KAGUYA プロジェクト 5 年間の流れ



KEEP (キープ)

住民リーダーを育成して、
地域を活性化します。

広陵町地域包括支援センター・畿央大学が連携して開催した「介護予防リーダー養成講座」を修了したボランティアグループの愛称です。黒地に「KEEP」と書かれたTシャツが目印です。町内での運動教室や出前講座、サロン運営と様々な町内行事・イベントに参加して、皆さんの健康づくりをお手伝いします。



2015 年度「奈良介護大賞」受賞

TASK (タスク)

町や大学のイベントに
学生が参加・協力します。

理学療法士、看護師、管理栄養士、建築士、教員などをめざす学生 100 名以上が在籍する、健康支援学生チームの愛称です。「TASK」と書かれたネイビー(濃紺)のTシャツが目印です。健康チェックや運動指導を通して、子どもから高齢者まで地域の方々の健康を支援します。町内の健康増進事業にもボランティアとして参加していきます。



月 1 回、自主勉強会を開催

認知症 カフェ

認知症ケアを専門職と一緒に
学べる場所を提供します。

認知症にならないためにはもちろんですが、気軽にできる物忘れチェックや認知症に関するミニ講義、介護相談を行います。学生や地域の皆さんとコーヒーやお茶を飲みながら、気軽に認知症について話します。H28 年度以降は講義を受けた方を「認知症サポーター」として登録して、地域のリーダーとして活躍していただく予定です。



愛称は「Kio オレンジ喫茶」

アンケート調査

1 年目（平成 27 年度）と 4 年目（平成 30 年度）に広陵町の高齢者の 85%にあたる 6,800 人を対象としたアンケート調査を実施します。地域の現状や課題を探るとともに、住民リーダーや学生チーム、認知症カフェ等の活動・交流が、皆さんの健康にどんな影響を及ぼしたのかを調査します。発見された健康課題や研究成果は広陵町に還元し、まちづくりに活かされます。

健康データ一元化

点在している健康データを一つにまとめて相関関係を調査することで、皆さんの「元気のヒケツ」や「健康上の課題」が何なのかを明らかにし、広陵町と一緒によりよい健康増進施策を検討・提案します。研究にあたっては町と大学でNDA（秘密保持契約）を締結し、プロジェクトに協力いただいた皆さんの個人情報秘匿化されますのでご安心ください。

報道発表・行政情報

奈良新聞

平成 27 年 10 月 3 日

平成 27 年 12 月 7 日

広陵町広報誌 広報こうりょう

平成 27 年 11 月号

平成 29 年 12 月号

平成 30 年 1 月号

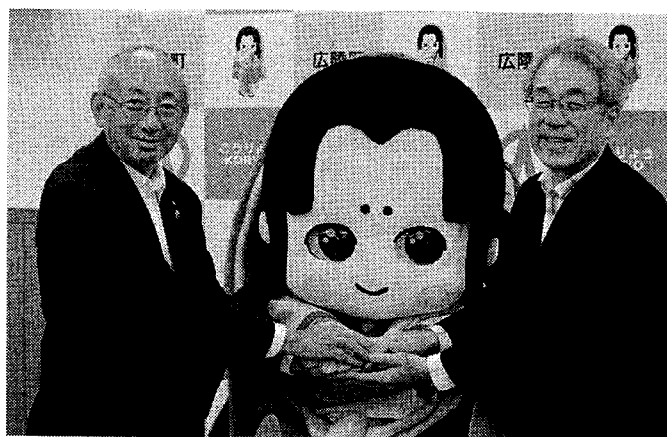
平成 30 年 2 月号

平成 30 年 3 月号

平成 30 年 4 月号

地域つながり健康に

広陵町、畿央大 データ収集し検証



記者発表した山村町長（左）と冬木副学長（中央は、町のキャラクターかぐやちゃん）＝2日、広陵町笠の町立総合保険福祉会館

畿央大学（広陵町馬見中4丁目）と広陵町は、健康な町づくりと大学の研究・教育を連携して進める「広陵町×畿央大『KAGUYAプロジェクト』」を業に畿央大学が申請

開始させると2日、発表した。文科科学省が平成20年から実施している補助事業「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に畿央大学が申請し、県内に本部がある大学として初めて採択された。同大学と広陵町は既に介護予防リターナー養成などを進めており、総勢150人の健康支援学生チームも発足している。今後5年間で40歳以上の住民の健康データを一元化することや、個人が健康状況を確認できるアプリの作成などを目指す。大学側は地域のつながりの強弱が実際の住民の健康にどのように反映されるかを科学的に検証したいとしており、行政側は研究に協力することで住民の健康を維持できると期待している。本年度は65歳以上の住民を対象に健康状態に関するアンケートを行い、来年1月をめどにデータ化する。アンケートに当たっては町の協力を得ながら学生チームが訪問するなどし、きめ細かなデータ収集を目指す。現在、町が掌握しているデータは町の検診受診者や国民健康保険のデータベースなどに限られ、町民全体の保健指導等には不十分だった。同大学の冬木正彦副学長は「住民の協力がなくてはできない総合プロジェクトで、地域に貢献できると期待している」と抱負を述べ、同町の山村吉田町長は「町制60周年の記念す

え、住みよいまちづくりのお手伝いができる。ベき年に町民が元気で快適に暮らせるプロジェクトがスタートできうれし」と喜んでいる。同町は8月20日現在、65歳以上の人口は7927人で高齢化率は約22%、10年後の高齢者人口は9000人を超える見込まれる。



応援態勢を盤

県南部の4消防署

大峰山脈で

吉野消防署など県南部の4消防署は、上北山村の大峯奥駈道で合同山岳救助訓練を行い、応援体制などを確認した。大峰山脈の日本岳から大普賢岳に至る登山道で、けがをした登山者が救助を待っている想定。管轄の吉野消防署が現場に急行すると同時に五條、大淀、下市の各署に応援を要請。各署の山岳救助隊と県広域消防組合本部支援隊など総勢約20人が参加した。山小屋がある和佐又

バーテンダー世界一に輝いた金子道入さん（右から3人目）＝9月4日、南アフリカ・ケープタウン



強風で本殿千木

比売久波神社 県有形文化財



きのぼろ (6742)



交通事故 県警1日

件数 13

本年累計 3797 (-576)

死者 0

本年累計 34 (-3)

傷者 13

本年累計 4838 (-765)

()内は前年比増減数

2日現在

情報や犯罪の発生情報や被害の「ナボク」(時更新、掲載していただける地域づくり、防犯ください。

9月25日午後女子高校生がメラのようなられた。不審者の特徴は175センチ、上着、黒髪長髪

運動習慣つけ

ロコモ防ごう

要介護の要因解説

畿央大でシニアキャンパス

広陵町と畿央大学が連携して健康に強いまちづくりを目指す「KAGUYAプロジェクト」のキックオフイベントとして、シニアキャンパスが6日、広陵

町馬見中4丁目の同大で開かれた。大学周辺に住むシニア世代約50人が参加し健康に対する意識を高めた。同大学ヘルスプロモーションセンターが主



ロコモ度を測るテストに挑戦する参加者116日、広陵町馬見中4の畿央大学

催、同町地域包括支援センターが共催。「ロコモと認知症の意外な関係」をテーマに、理学療法と看護を専門とする大学教員が、運動機能が低下するロコモティブシンドローム予防と認知症に関してそれぞれ解説した。ロコモ予防の講座では、要介護状態の要因となるロコモとメタボ、認知症の関係について説明し、運動習慣をつけることの大切さと呼び掛けた。ロコモ度を測るテストも行われ、参加者は自分の体の状態を確認していた。広陵町在住の無職男性(77)は「筋肉がだいぶ衰えていることが分かった。これから運動していきたい」と話した。



千本突きを楽しむ園児ら116日、宇陀市大宇陀拾生の市文化会館駐車場

世代超え昔の

天理・特養ホーム「ひびきの郷」で

お手玉など住民

社会福祉法人天寿会(林芳繁理事長)は6日、天理市岸田町の特別養護老人ホーム「ひびきの郷」で、第27回

「フェスタひびきの郷」と第5回「生活介護支援サポーター祭り」を開き、地域住民らが世代を超えて交流し

障害者水泳選手を育成

五輪の星



指導も

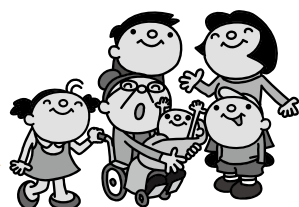
平成32年の東京パラリンピックに向け、障害者水泳の選手などの育成を目指したイベントが6日、大和郡山市宮堂町のまほろば健康パークスイムピア奈良で開かれ、競技者3人と指導者8人が参加した。

広陵町×畿央大学

「KAGUYA プロジェクト」 始動報道発表

Keeping Active across Generations Uniting the Youth and Aged

若者と高齢者が一体となって、世代を超えていきいきとし続けられるまちづくりを目指します。



「KAGUYA プロジェクト」は、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「ソーシャル・キャピタル創出とヘルスケアデータ一元化による地域包括ケアシステム研究拠点の形成」の助成を受けて実施します。

KAGUYAプロジェクトキックオフイベント

畿央大学シニアキャンパス

～ ロコモと認知症の意外な関係 ～

畿央大学の教員、学生チーム、行政、住民ボランティアチームが協働して地域のシニア世代の方々の健康づくりを応援するイベントです。

◆日時 12月6日(日) 午前9時30分～正午

◆場所 畿央大学

◆内容(2部制)

① 9:30～10:30 ② 10:40～11:40

ロコモティブシンドローム予防ミニ講座

ロコモ度チェックコーナー

認知症カフェ(ミニ講義・介護相談コーナー)

KEEP お手軽運動教室(11:45～12:00)

◆対象者 シニア世代の方 ◆参加費 無料

◆申し込み方法 住所・氏名(ふりがな)・電話番号、年齢、メールアドレスを明記し、Eメール・ファクス・はがきでお申し込みください。

◆申し込み・問い合わせ先

635-0832 広陵町馬見中4丁目2番2号

畿央大学企画部シニアキャンパス係

Eメール info@kio.ac.jp

☎(54) 1601 ㊟(54) 1600



▲山村町長・かぐやちゃん・冬木副学長

10月2日、さわやかホールで、広陵町と畿央大学との連携事業として「KAGUYAプロジェクト」始動の報道発表を行いました。

この事業は、畿央大学が奈良県で初めて、文部科学省の補助事業である「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に採択されたことを受けてスタートしたものです。今後、広陵町と畿央大学は、協議を深めながら、健康を目指すまちづくりと実践教育・研究を連携して進めていきます。

これまで広陵町が畿央大学と連携して進めてきた、運動教室や介護予防、認知症予防などの健康増進のための施策を、より一層充実させるために、「KAGUYAプロジェクト」を通して、町民の皆さんが元気でいきいきと生活できるまちづくりを推進したいと考えています。



▲報道発表の様子

全国大会出場！
新体操 大西彩水さん
(真美ヶ丘中学校)

10月7日、大西彩水さん(ミューゼ新体操クラブ)が全国大会に出場されるため、山村町長のもとへ表敬訪問されました。

大西さんは、訪問後、10月9日から11日に行われた「全日本ジュニア新体操選手権大会」に出場。女子団体部門で9位という成績でした。大西さんは、「(8位までが入賞で)9位となり入賞できず悔しいが、自分たちが持っている力を発揮でき良い経験ができた。」と話されました。



▲さらなる活躍を期待しています

突然ですが

あなたは「健康」ですか？



▲ 最近、疲れが取れないTさん

▲ 最近、大きくなったOさん

広陵町×畿央大学 KAGUYA プロジェクト

Keeping Active Generation Uniting the Youth and the Aged
このプロジェクトは、若者と高齢者が一丸となり、世代をこえて、住民が元気でいきいきと暮せるまちづくりをめざす取り組みです。

KAGUYA プロジェクトって？

畿央大学は広陵町と連携し、さまざまな健康増進のための人材育成や施策を進めてきました。その実績もあり、文部科学省の補助金である「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に奈良県で初採択されました。この助成を受けて、健康に強いまちづくりと実践教育・研究をコラボした「KAGUYA プロジェクト」が平成27年よりスタートしました。

KAGUYA プロジェクトが目指すのは？

広陵町と協働して地域の健康情報をまとめたデータベース構築を進め、広陵町介護予防リーダー（KEEP）養成講座（詳しくはP.4参照）、認知症カフェなどの認知症施策に関する人材育成を行い、畿央大学の健康支援学生チーム（TASK）などとともに、皆さんの健康増進や介護・認知症施策に寄与していきます。



▲ KEEP



▲ TASK



▲ 認知症カフェ



KAGUYAプロジェクト
研究代表者 文准教授



「KAGUYA
プロジェクト」って
何ですか？

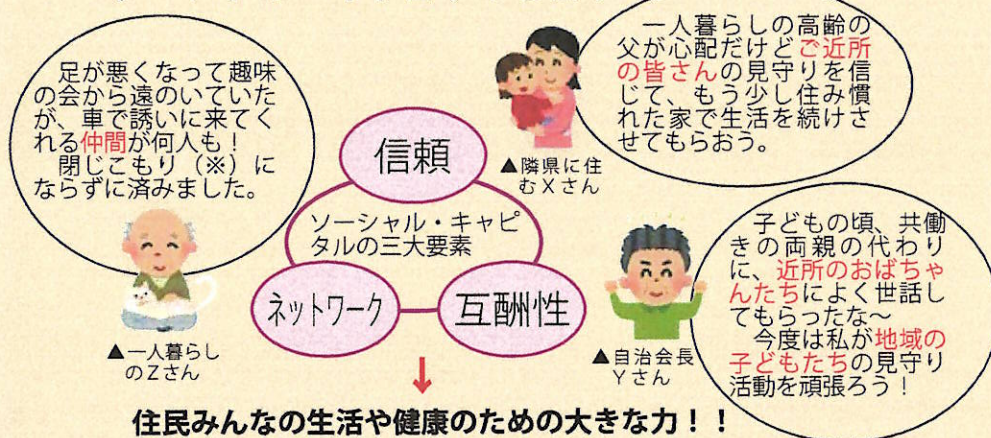


KAGUYAプロジェクトについて分かったけど、「健康」になるために一人頑張るのは...



安心して下さい
一人で頑張る必要はないですよ！

ソーシャル・キャピタルとは？



住民みんなの生活や健康のための大きな力！！

※閉じこもり…外出や交流が乏しく、身体・心理・社会的な機能が低い状態。要介護リスクとして注目されている。



主なアンケート内容

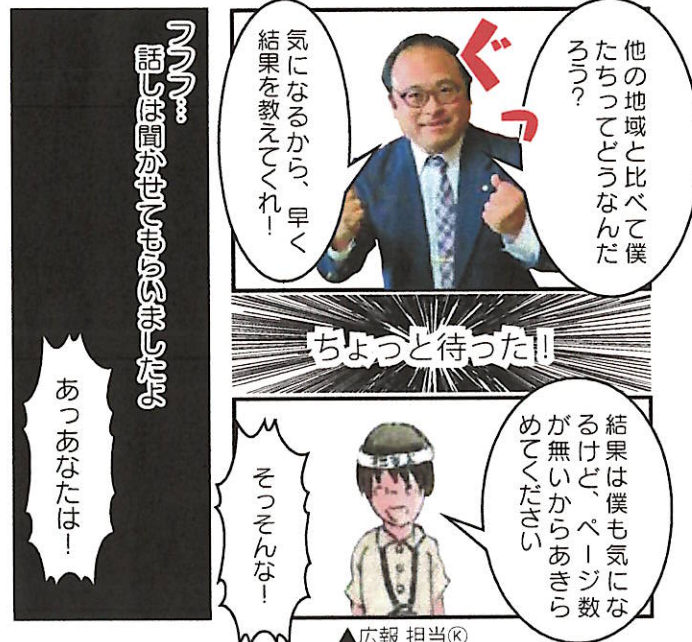
- ふだんの暮らしぶりについて
- カラダやココロの状態は？
- 認知症について考えていること
- 地域の人たちとつながっていますか？

など

※ 65歳以上対象「健康長寿のヒケツ」アンケートを平成28年3月に、40歳以上65歳未満対象「健康のヒケツ」アンケートを平成28年11月～12月に実施しました。



そういうことならKAGUYAプロジェクトの調査結果を連載にしたらどうですか？



ということで…

KAGUYAプロジェクト
～「健康」で「長寿」なまちへの
スタートライン～

連載決定！！

次回はアンケート結果を発表

KAGUYAプロジェクト

「健康」で「長寿」なまちへのスタートライン

前回のあらすじ

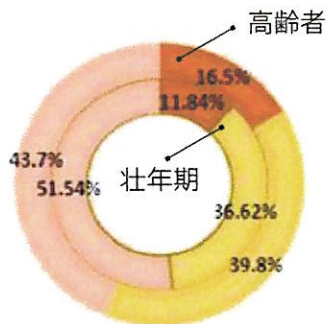
KAGUYAプロジェクトが「健康に強いまちづくり」を目指していることを知ったTさんとOさん。今回はプロジェクトのスタートラインともなる、広陵町民の現在の健康状態についてのアンケート調査の結果を見ていきましょう。



アンケート① あなたの現在の健康状態はいかがですか

壮年期と高齢者の比較

■ よくない ■ ふつう ■ よい



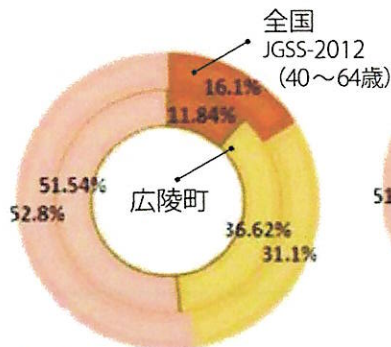
※壮年期…40歳以上65歳未満
高齢者…65歳以上を指します。

・壮年期では、半数の人が健康状態は「よい」と感じていますが、高齢者になると、「よくない」と感じている人の割合が増えています。やはり、年齢とともに健康を感じにくくなるようです。

・全国規模のJGSS調査（2012年）と比べると、壮年期、高齢者ともに「ふつう」と回答する人が多いです。特に高齢者では、「よい」と答える人が少ない結果でした。

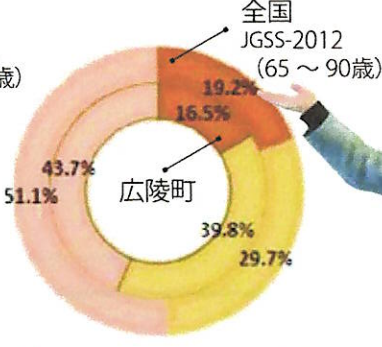
壮年期の全国平均の比較

■ よくない ■ ふつう ■ よい



高齢者の全国平均の比較

■ よくない ■ ふつう ■ よい



※日本版General Social Surveys (JGSS) は、大阪商業大学JGSS研究センター（文部科学大臣認定日本版総合的社会調査共同研究拠点）が、東京大学社会科学研究所の協力を受けて実施している研究プロジェクトである。

広陵町民、特に高齢者世代では、全国の同世代と比べて「私は健康だ」と自信を持って答えられる人が少ないようです。

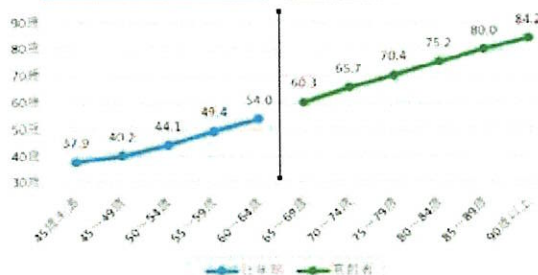
※グラフ内の数値は小数第2位を四捨五入したため100%にはなりません

アンケート② 「気持ちの年齢」は何歳ですか

壮年期と高齢者の比較

壮年期

高齢者



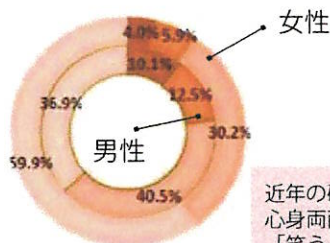
・総合的に「健康」には自信がなさそうな広陵町民ですが、「気持ちの年齢」は実際の年齢よりも若く、ほぼ全ての年齢層で、実年齢よりも5歳以上若いと回答していました。



アンケート③ 普段の生活で、声を出して笑う機会はどのくらいありますか

壮年期の男女比

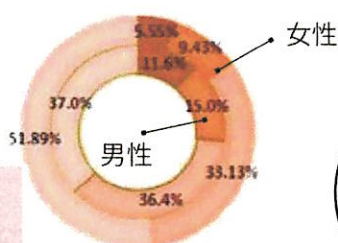
■ ほとんどない ■ 月1～3回 ■ 週1～5回 ■ ほぼ毎日



近年の研究により、心身両面の健康に対し「笑うこと」の効果が証明され始めています。

高齢者の男女比

■ ほとんどない ■ 月1～3回 ■ 週1～5回 ■ ほぼ毎日



・壮年期よりも高齢者の方が笑う機会は少なくなります。そして、壮年期、高齢者の両方で、男女差が大きいこともわかりました。

男性は女性と比べて、圧倒的に笑う機会が少ないですね！

だからこそ、次回は認知症について広陵町民がどう思っているのかを見ていきましょう！

次回へ続く

心配ですよ～

健康といえば、歳を重ねるごとに心配になるのが「認知症」ですね

「気持ち」では若さを保っているの、後は自信を持って身体も健康だといえるようになりたいね

▲ 最近、疲れが取れないTさん ▲ 最近、大きくなったOさん

認知症について理解を深めるもう一つの機会

広陵町×畿央大学 KAGUYA プロジェクト

第3回シニアキャンパス開催

テーマ：シニア世代のためのオープンカレッジ

～認知症について考えよう～

時 2月23日(金) 午後1時～3時30分

場 畿央大学 対 シニア世代 ￥ 無料

【プログラム】

時間	内容
12:30	受付開始
13:00～13:30	KAGUYAプロジェクト進捗報告会
13:30～14:40	講演「認知症の人から学ぶ、幸せな暮らせ方」 講師 愛媛大学教授 谷向 知先生
14:40～14:55	介護予防のための運動コーナー

【同時開催】

オレンジ喫茶
13:00～15:30

- ・iPadを用いた認知症アプリ体験
 - ・オレンジロバ作り
 - ・畿央大教員による介護相談コーナーなどを実施します。
- ※他のプログラムにご参加の方も、終了後に参加できます。

申 【方法】はがき・FAX・Eメールのいずれかにお名前(ふりがな)・年齢・住所・電話番号・メールアドレスをご記入の上、お申し込みください。

【送付先】〒635-0832 広陵町馬見中4-2-2

畿央大学総務部 シニアキャンパス係 ☎ (54) 1602 FAX (54) 1600

Eメール gene@kio.ac.jp



手先の細かい作業は認知症の予防にもなりますので、ぜひ皆さんも作ってみてください。

▲ オレンジロバ
(「認知症サポートキャラバン」のマスコット)

前回のあらすじ

広陵町民の「健康」に対するアンケート結果を3名の先生方と見てきたTさんとOさん。今回は「認知症」について町民が日々どのように感じているのかを見ていきましょう。



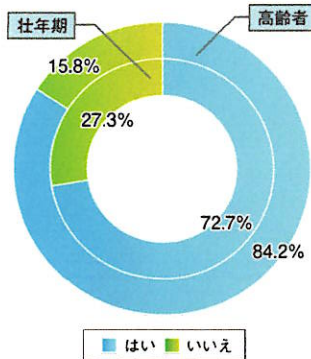
今回は私と一緒に認知症についてのアンケート結果を見ていきましょう！



アンケート④ 認知症に対する関心はありますか

壮年期と高齢者の比較

※壮年期…40歳以上65歳未満
高齢者…65歳以上



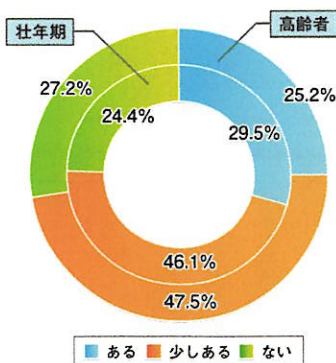
・高齢者で8割以上、壮年期では7割以上の方が認知症に対して関心を持っていました。

そのほかに、高齢者、壮年期ともに、男性よりも女性の方が高い関心を持っていました！



アンケート⑤ 認知症に対する不安はありますか

壮年期と高齢者の比較



・認知症に対する不安が少しでもあると答えた人は、高齢者、壮年期ともに7割以上でした。

こうなったら認知症について色々調べるぞ！



こんなにも不安と思っている方がいるんですね！

※グラフ内の数値は小数第2位を四捨五入したため、100%にはならないことがあります。

安心して認知症を学びたい方必見！

2/23(金)

広陵町×畿央大学 KAGUYA プロジェクト

第3回シニアキャンパス開催

「認知症の人から学ぶ、幸せな呆け方」の講演をお聞きください

▶シニアキャンパスの詳細はこちら



認知症への関心の高い人やさまざまな知識を持っている人ほど、認知症への不安は高いという結果も出ていますので不安になり過ぎないように調べましょうね！



KAGUYAプロジェクト

「健康」で「長寿」なまちへのスタートライン

前回のあらすじ

広陵町民の「認知症」に対するアンケート結果を先生と見てきたTさんとOさん。今回は、運動や仕事といった外とのつながりについて町民がどのように感じているのを見ていきましょう。



松本助教

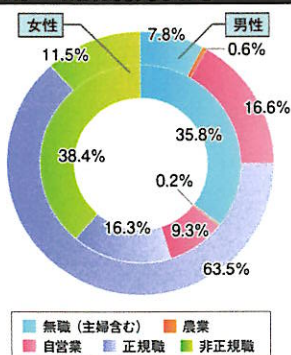
高取准教授

KAGUYA プロジェクト
研究代表者 文准教授

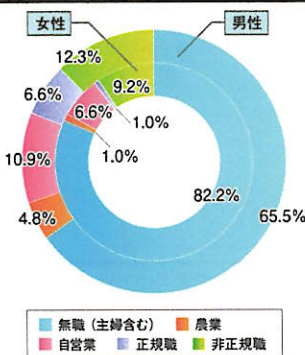
アンケート⑦ 現在のあなたの主たる仕事は？

※壮年期…40歳以上65歳未満
高齢者…65歳以上

壮年期の職業別男女比



高齢者の職業別男女比



- ・壮年期では、男性は「正規職」が最も多いですが、女性は「非正規職」と「無職（主婦含む）」が同じくらいの割合を占めており、正規職は非正規職の半分程度しかいません。
- ・高齢者になると、男女ともに無職の割合が増えますが、男性の3割以上、女性の2割弱は、まだ現役として働いています。



私もまだまだ働かないといけないな

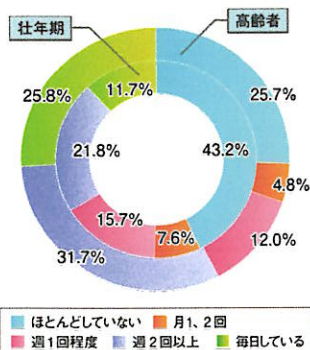
平成28年国民生活基礎調査と比較すると、55～69歳女性の無職の割合がやや高いようです



アンケート⑧ 身体を動かす運動やスポーツ（散歩やジョギングを含む）をどれくらいしていますか？

※グラフ内の数値は小数第2位を四捨五入したため、100%にはならないこともあります。

壮年期と高齢者の比較



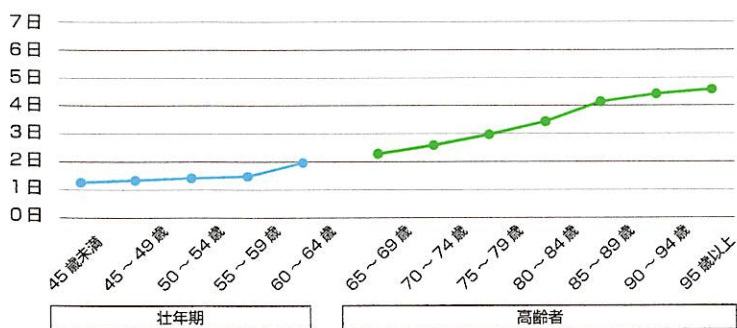
- ・壮年期よりも高齢者の方が、「週2回以上」「毎日している」と回答した人が多いという結果でした。
- ・この結果には、仕事の状況も関係しているかもしれません。壮年期、高齢者ともに、正規職の人よりも無職の方が、「週2回以上」「毎日している」と回答した人が多くなっていました。



企業などに勤めている人にとって、運動やスポーツに意識的に取り組むことは難しいことといえそうですね

アンケート⑨ 外出せず、主に家およびその周辺で過ごす日が週何日ありますか？

壮年期と高齢者の比較

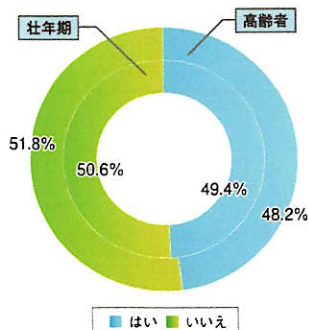


男性よりも女性の方が社交的で外出も多いイメージがありますが、今回の結果は異なっていました。この結果については、今後より分析を深めていく必要がありますね。

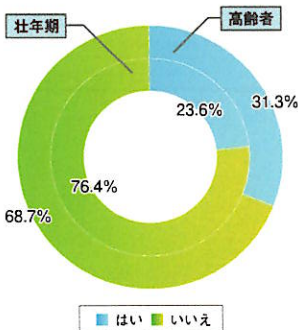
- ・年齢とともに、家およびその周辺で過ごす日が増えていくようです。80代以降は、週の半分以上を家およびその周辺で過ごしています。
- ・男女別では、男性よりも女性の方が家及びその周辺で過ごす日数は多いという結果でした。

アンケート⑩ 日常生活において次のような活動をしていますか？（壮年期と高齢者の比較）

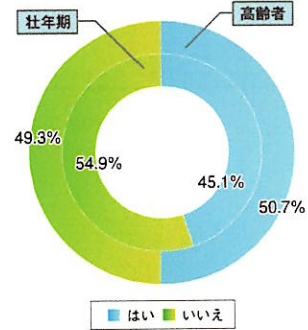
地域のお祭りや行事への参加



奉仕活動やボランティア



スポーツ・趣味・娯楽



- ・「地域のお祭りや行事などへの参加」には壮年期と高齢者での差はみられませんが、「奉仕活動やボランティア」「スポーツ・趣味・娯楽」は、高齢者の方が多く活動をしています。また、「地域のお祭りや行事への参加」「スポーツ・趣味・娯楽」は、壮年期、高齢者ともに半数近くの方が活動していますが、「奉仕活動やボランティア」は2～3割程度にとどまりました。
- ・いずれの活動も、高齢者男性の参加が最も多いという結果でした。仕事からの引退とともに地域などの活動にシフトしていく傾向があるのかもしれません。



KAGUYAプロジェクト

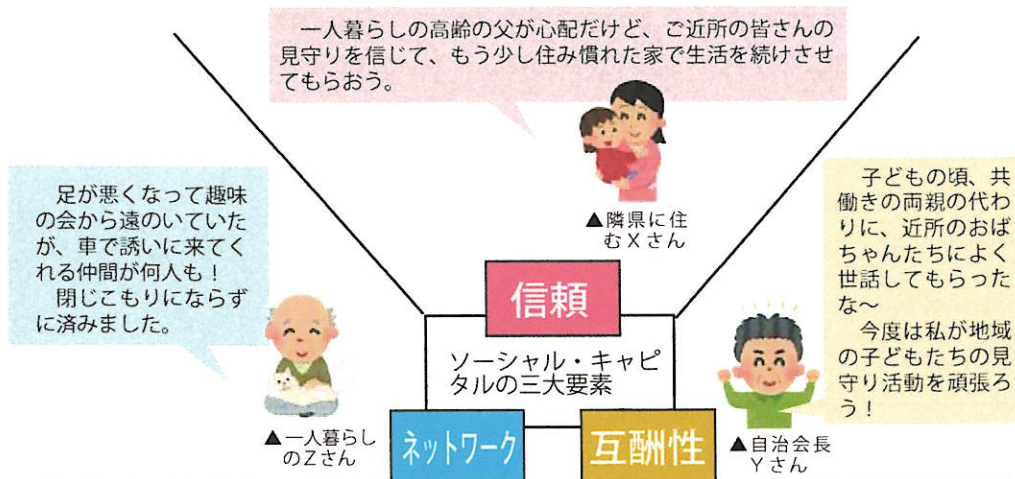
「健康」で「長寿」なまちへのスタートライン

前回のあらすじ

広陵町民の「認知症」に対するアンケート結果を先生方と見てきたTさんとOさん。今回は、ご近所や社会といった外とのつながりについて町民がどのように感じているのか見ていきましょう。



ソーシャル・キャピタルとは



住民みんなの生活や健康のための大きな力！！



▲KAGUYAプロジェクトホームページはこちら

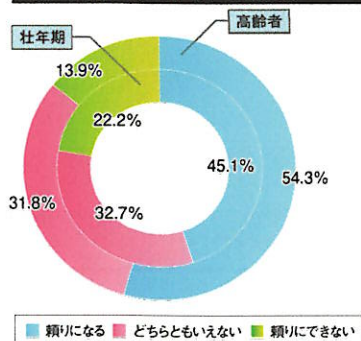
※グラフ内の数値は小数第2位を四捨五入したため、100%にはならないこともあります。

※1 主観的健康感…自分で自分のことを健康だと感じていること

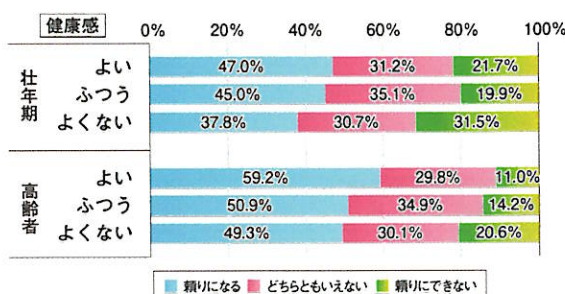
信頼

アンケート⑪ 「近所の人々」は頼りにできますか？

壮年期と高齢者の比較



段階別の主観的健康感※1と頼りになる程度

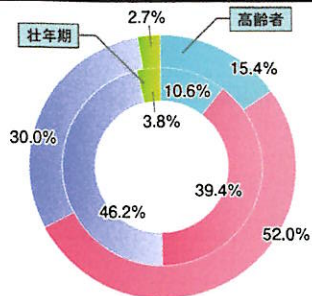


- ・壮年期よりも高齢者の方が、近所の方は「頼りになる」と考えている人が多く、半数以上を占めています。
- ・壮年期、高齢者ともに、女性の方が「頼りになる」と考えている人が多くなっていました。



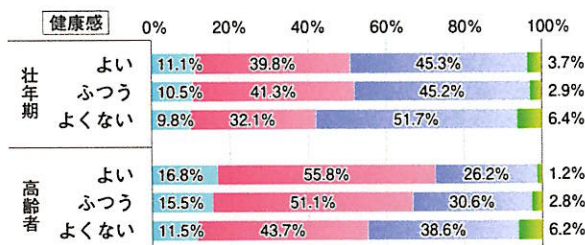
アンケート⑫ ご近所の方とどの程度おつき合いをされていますか？

壮年期と高齢者の比較



■ 互いに相談したり日用品の貸し借りをするなど、生活面で協力
■ 日常的に立ち話をする程度
■ あいさつ程度の最小限のつきあい
■ まったくない

段階別の主観的健康感とおつき合いの程度



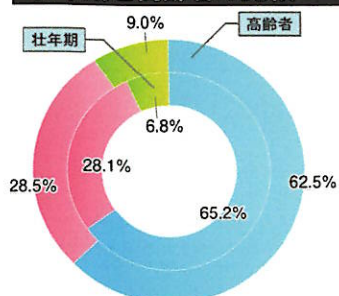
■ 互いに相談したり日用品の貸し借りをするなど、生活面で協力
■ 日常的に立ち話をする程度
■ あいさつ程度の最小限のつきあい
■ まったくない

- ・ 壮年期より高齢者の方がご近所づき合いの程度は高いという結果でした。また、壮年期、高齢者ともに、女性の方がご近所づき合いの程度は高くなっていました。
- ・ 80歳頃までは、年齢ともにご近所づき合いの程度は増していきますが、それ以降は減少するという結果も出ました。

互酬性

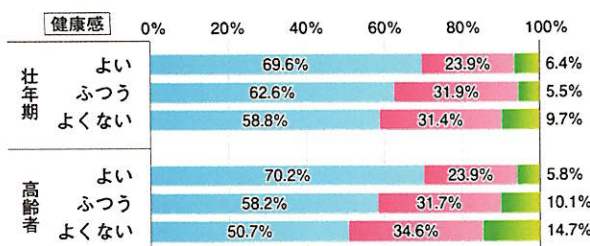
アンケート⑬ 「情けは人の為ならず」ということわざを、あなたは実践していますか？

壮年期と高齢者の比較



■ 実践している ■ どちらともいえない ■ 実践していない

段階別の主観的健康感と実践の程度



■ 実践している ■ どちらともいえない ■ 実践していない

- ・ 高齢者よりも壮年期の方が、「実践している」と答えた人は多いという結果でした。また、女性の方が「実践している」人が多くなっていました。



高取准教授



あなたは健康ですか？

